

書叢解表學通普

世界史

東京

六盟館編輯所編

表解

會合資六盟

前篇 37 22

序言

一、本書は中學校、師範學校の生徒諸君及び小學校教員檢定受験者諸氏の爲めに編者が教授の經驗に徴し確實なる材料を精選し之を表式的に解釋し秩然序を逐ひ統を立て以て明確に理解し容易に記憶せしめんが爲めに編纂したものである。

一、諸所に餘白を剩し卷末に白紙を附加したるは諸氏が書入をなし種々研究の工夫をせられん爲め便利を考へたものである。

一、諸氏は本書を備忘録とし参考書として常に携帯し如上の目的を達せらるゝことを得ば編者の満足は之に過ぎぬのである。

明治三十七年十一月

編者識

西洋史表解上卷

目次

第一篇 上古史	一
一 エジプト	一
二 ヘブライ	二
三 フェニキア	三
四 バビロニア	三
五 アッシリア	四
六 ペルシア	五
七 ギリシアの勃興	八
八 ペルシア戦争	一〇
九 アテネの隆盛	一二

一〇 ペロポネリスの役	一三
一一 スバルタデーベ、マケドニアの争覇	一六
一二 アレキサンドル大王の事業	一八
一三 ギリシアの文物	二〇
一四 ローマの初世	二二
一五 ローマのイタリヤ統	二三
一六 ポエニ戦争	二六
一七 ローマの外國征服	二七
一八 ローマ共和政腐敗	三〇
一九 ケーザルの事業	三二
二〇 ローマの帝政(其一)	三四

2

- 二一 ローマの帝政(其二)……………三五
- 二三 キリスト教の弘布……………三八
- 二四 ローマの文物……………三九

第二篇 中古史……………四二

- 一 種族移轉と西ローマの滅亡……………四二
- 二 上古史中古史に見えたる人種……………四四
- 三 東ローマとペルシア……………四五
- 四 サラケン……………四六
- 五 ギリシア帝國とローマ法王……………四八
- 六 カロラ大帝の事業……………四九

- 七 ノルマン……………五二
- 八 神聖ローマ皇帝とローマ法王……………五四
- 九 イギリスとフランス……………五八
- 一〇 十字軍……………六二
- 一一 中古に於ける西ヨーロッパの社會……………六七
- 一二 モンゴルの西侵……………六八
- 一三 オスマンリ、トルコの侵入……………七〇
- 中古に於ける歐洲諸國の形勢……………七三
- 地理上の發見……………七六
- 文藝復興……………八〇

世界史表解後篇

目次

第三篇 近古史……………一

- 一 宗教改革……………二
- 二 新教の弘布と其反動……………四
- 三 西葡兩國の殖民とイスパニアの強大……………七
- 四 オランダの獨立……………八
- 五 エギリスの宗教改革……………一〇
- 六 佛國宗教上ノ爭亂……………一二
- 七 三十年戰爭……………一五
- 八 オランダの隆運……………一六

- 九 英國ノ革命……………一九
- 一〇 佛國の富強……………二二
- 一一 イスパニアの繼承戰爭……………二五
- 一二 北歐及び東歐の形勢……………二八
- 一三 ロシアの勃興……………三一
- 一四 プロシアの勃興……………三四
- 一五 七年戰爭……………三六
- 一六 殖民地に於ける英佛の衝突……………三九
- 一七 露國の侵略とポーランドの滅亡……………四二
- 一八 北米合衆國の獨立……………四三
- 一九 十八世紀に於ける社會狀態と思潮……………四六

二〇	佛國革命の初期……………	四八
二一	佛國革命の恐怖時代……………	五〇
二二	佛國革命の末期……………	五三
二三	ナポレオンの全盛……………	五七
二四	ナポレオンの末路……………	六一
第四篇現代史……………		
一	革命主義の反動……………	六四
二	ギリシアの獨立……………	六五
三	アメリカに於ける……………	六八
四	各國殖民地の獨立……………	七一
五	七月革命……………	七四
六	東方問題……………	七七
六	二月革命……………	七七

七	クリミア戦争……………	八〇
八	極東の形勢……………	八三
九	伊太利の統一……………	八五
一〇	北米合衆國の南北戦争……………	八七
一一	普墺戦争……………	九一
一二	普佛戦争……………	九五
一三	露土戦争……………	九九
一四	ベルリン會議後の歐洲……………	一〇二
一五	ベルリン會議後のアジア……………	一〇五
一六	北米合衆國近狀……………	一〇六
一七	ベルリン會議後のアフリカ……………	一〇八
一八	十九世紀の文明……………	一一一

世界史表解前編

第一篇 上古史

1. 建國

エジプトの早く開けたるは全くニル河の賜にて其建國は紀元前三四千年の間にありといふ。

2. 盛世

富強を極めしは前千四三百年頃のことにしてセチ一世ラメス二世の如き名君出て永く事蹟を後昆に遺せり。

一、エジプト

一、學問

數學、天文學、醫學等大に進歩し(一年を三百六十五日四分一と算定し屍體を永遠に保存したるが如き)文字は象形文字を使用せり。

六盟館編輯所編

二、ヘブライ

- 1. 建 國
- 2. 盛 世
- 3. 政 治 宗 教

前一二三〇年頃モーセの子ヨシウアの建設にかゝる。
 ダビデ王(前九八〇頃)の子ソロモン王の時隆盛の極に達せしが前九五三年國土分裂してイスライル、ユダヤの二國となる。

一、宗教…この國民につきて特記すべきは固く一神教を信じたることなり中古の耶穌教はこれより出づ。

二、政治…初め神意政治なりしが後に王政に變ず。

- 3. 文 化

二、美術…建築は宏大と堅牢とを特色とし(金字塔、方尖塔、獅身人面像、螺旋堂等)繪畫及び彫刻は變化に乏しかりき。

三、制度…階級制度にして君主(獨裁)、僧侶、武士、平民の四階級あり子孫各々其職を世襲す。

四、宗教…自然を崇拜し又輪廻の説をも信じたり。

三、フェニキア

- 1. 建 國
- 2. 商 業 國
- 3. 文 明 的 發 達
- 1. 盛 世

各獨裁の君主を戴ける市府の聯合より成り前一五〇〇年頃建國す市府中最も勢力ありしものをシドン、チルの二市とす。國人専ら通商殖民に努め曾て攻略を事とせざりき故に太古文化の傳播者として大功あり。

この國民につきて特記すべきは音標文字の發明なりこの文字現今歐洲諸國に行はるゝ文字の根元となる。

前二五〇〇年頃建國せられ前二〇〇〇年頃に至り首府バビロンは一時文化の中心たりき。

四、バビロニア

- 2. 文 化

一、學問…天文學數學大に發達して天體の觀測、曆法、度量衡等すべて精細、(日月蝕をも豫知せり)文字は楔形文字を用ひたり。

二、美術…建築は煉瓦、石灰等を用ひて造營し規模宏大にして彫刻を施せり工藝はなべて精巧(バビロン刺繍は其一例)

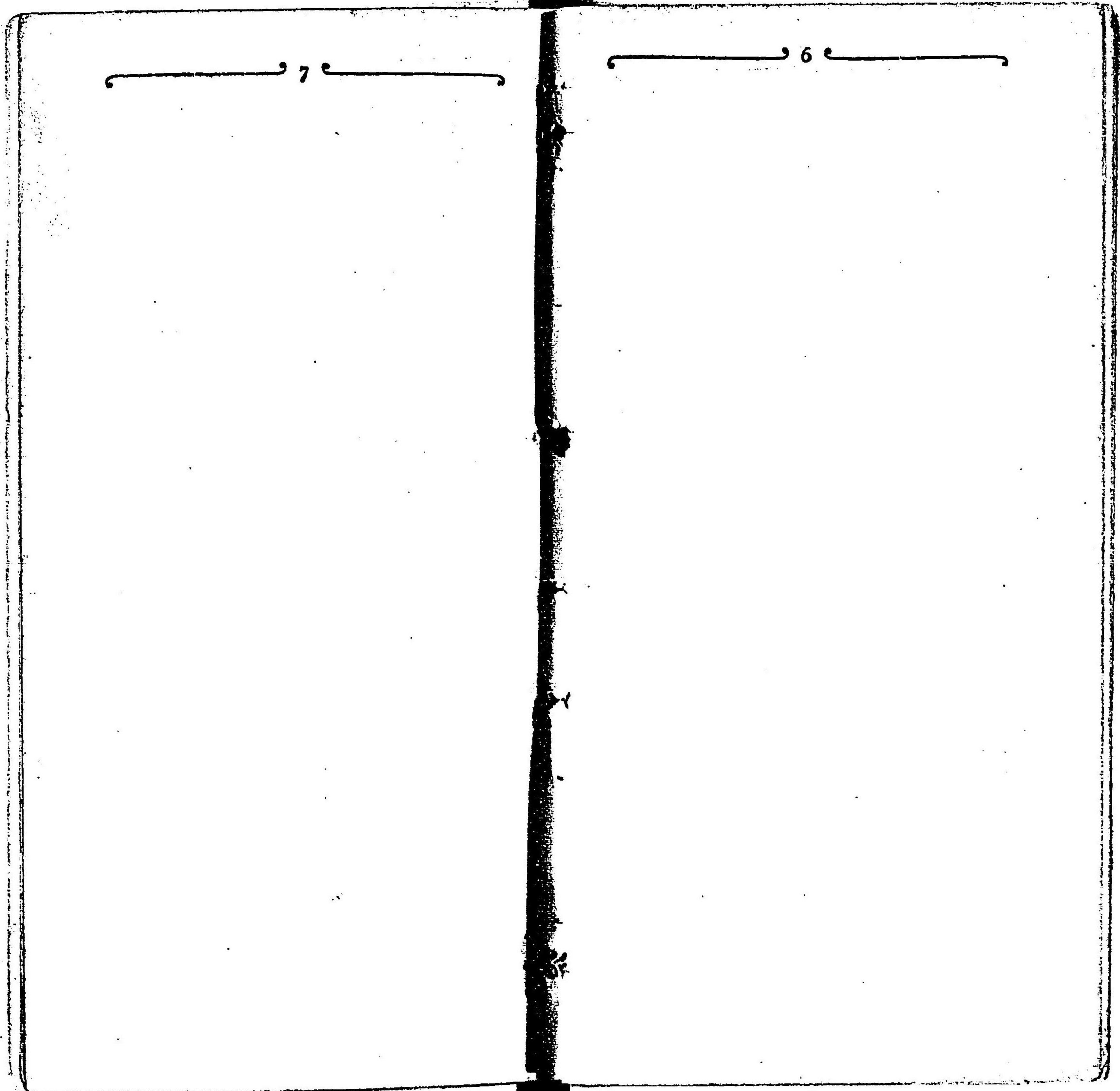
三、政治…政治は君主獨裁し法律嚴しく人民には階級なし、宗教は多神教を奉ぜり。

4 五、アッシリア

- 1. 建 國……前千三百年頃バビロニア殖民地の獨立せるものなり。
- 2. 盛 世……前八世紀より七世紀に亘りて隆盛の極に達しサルゴン、アッスルバニバル等の如き名君出て當時の開明國全部を統御したり
- 3. 外 寇……前六二三年の頃より遊牧の蠻民(スキタ族)續々亂入し終にアッシリア國分割の素因となる。
- 4. 滅 亡……前六〇六年メデアのキアクサレス、バビロンの鎮將ナボボラツサル兩人の滅す所となり北部はメデアに歸し南部はナボボラツサルの領土となる(新バビロニアの興起)。
- 5. 對 立 國……アッシリア滅亡後は新バビロニア、メデア、リヂア(小アジアの西端)、エジプトの四國相對峙せしが其後悉くヘルシアに併吞せらる。

5 六、ヘルシア

- 1. 建 國……もとメデアの屬國たりしが前五五八年その知事キロス、メデアを滅して國を建つ。
 - 2. 盛 世……
 - 3. 衰 世……
 - 4. 宗 教……
- 一、キロス
メデアを滅したる後更にリヂア及びギリシア殖民地を併せ、又新バビロニアを滅してユダヤ人を解放せり。
- 二、カンビセス王……エジプトを征服したり。
- 三、ダリウ王
王權を擴張して無限となし行政組織を改造し軍道運河を開通し驛遞の法を定め租税を均一にし法貨を鑄造する等守成の大業を完うしたる後ギリシア遠征を企てしが志成らずして世を去りぬ
- (注) (三代約七十年間前五五九—同四八五)
3. 衰 世……ヘルシア遠征後は國帑缺乏内亂相次ぎて國勢次第に衰ふ。
4. 宗 教……ザラツストラ教(後の火教)一般に行はれたり。



7

6

七、ギリシアの興

1. アギリシ

ギリシア民族はベラスゲ、ドリア、イオニア等の諸族より成りギリシアに入りし後數多の小國を建てしがドリア族のスパルタとイオニア族のアテネとは漸次發達して強大なる勢力となりぬ。

2. タスバル

一、スパルタ

スパルタ人は粗朴剛毅にして尙武の精神に富み協同一致の美風を有したり其原由するところは(イ)リコルゴスの憲法(前八五〇頃制定)(ロ)リコルゴスの憲法を本としたる教育。

二、制度

上に二人の王を置きて専權を防ぎ元老院ありて政務を輔け大事は民會にて議決す、又別に監督官を置けり。

三、組織

市民平民奴隷の三階級ありて市民參政權を專有せり。

3. アテネ

四、スパルタの興起

前七五〇年頃より次第に國勢を張り前六世紀の中頃にはペロポネソス半島悉く其威に服せり。

一、アテネ

アテネ人は學藝を重んじ美術を貴び辯舌を練り競ひて通商航海に従ひ民主主義を愛し政爲進取の氣風盛にしてスパルタ人の性格とは甚しく相反せり。

二、制度

王政より執政官政治となりしが前五九四年ソロン憲法を制定し財産に應じて人民を四級に分ち民會豫審會を開設し各級の權利義務議會の權限等を規定せり。

三、アテネの興起

前五一〇年クリステネス出てて政權を握り憲法の修正をなして民主政を確立せしかば國威發揚して四隣に輝けり。

ハ、ペルシア
戦争

2. 戦記

1. 原因

因

- 一、ギリシア殖民地の動搖を防ぐにはギリシアを征服するの要あり。
- 二、アテネ人ヒビアス、ペルシアに逃げてダリオスの心を動かす。
- 三、ギリシア殖民地の叛亂（前五〇〇年）に際しアテネ之を助く。

- 一、第一次 陸軍はトラキア士兵に襲はれ海軍は颶風の厄に逢ひ空しく軍をかへす（前四九二）
- 二、第二次 ペルシア軍、海を渡りてアチカに上陸す、アテネの將ミルチアデス之と馬拉トンの野に戦ひて大捷を得たり（前四九〇）。
- 三、クセルクセス王親ら大兵を率ゐギリシアに入るスバルタ王レオダニダス

三、第三次

之をテルモビレの險に扼し手兵三百
と光榮ある戦死を遂ぐ（前四八〇）
アテネ人は一時難を海に避けしがテ
ミストクレスの危計功を奏してペル
シア海軍大敗しクセルクセス惶惶と
して歸國す（同年）

翌年ペルシアの陸軍はプラターエー
の野に粉碎せられ海軍は小アジアの
ミカレ岬附近にて破らる。

サラムスの海戦
ペルシアの全敗

3. 結果

果

- 一、小アジアなるギリシア殖民地の獨立（前四四九）。
- 二、ペルシアの退縮。

九、アテネの盛隆

1. テロス同盟

- 一、目的：ペルシア人の撃攘、海賊の掃蕩、エーゲ海の警備。
- 二、集會場：テロス島。
- 三、設備：金穀を貯へ船艦を備ふ。

(注)

前四七七年アテネ同盟主となりペリクレスの時には金穀をアテネに移し船艦を左右せり。

2. ペリクレス時ク

- 一、ペリクレス
- 二、ペリクレスの治

貴族の出身なり、哲學者、政治家、將軍、辯舌家の資格を兼ね備へ志高潔にして深く民主主義を愛し平生は質素を守りしも文學美術のためには千金の出資も更に吝める色なかりしといふ。國防に意を留め土木を興してアテネを修飾し文學、美術を奨励し又商工業を振作してアテネの霸業を完うしたりしがペロポネソスの役疫病の倒すところとなる。

一〇、ペロポネの役

1. 原因

- 一、アテネ、スパルタ兩國の性格及び政治思想の相反したること。
- 二、アテネの隆進に對する列國の嫉妬及び怨恨。
- 三、コリントと其殖民地たるコルキラとの紛争。

二、第一次

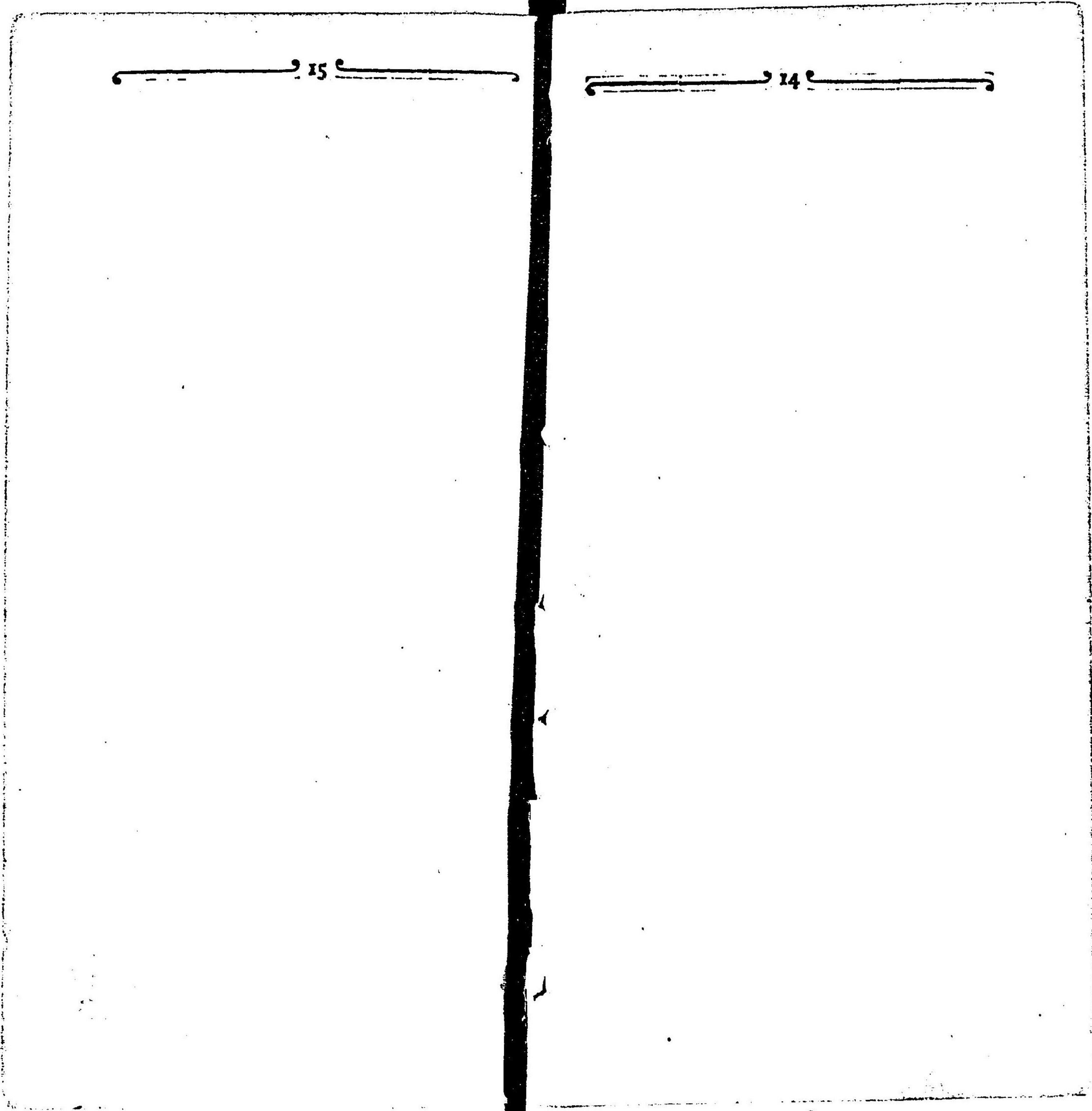
スパルタは陸軍アテネは海軍を以て相當りしが勝敗決するに至らずこの間疫病流行してアテネの名士多く死す(前四三二—同四二二)

二、第二次

一旦休戦の後前四一五年アテネはシチリア島のシラクサイを討ち全軍敗滅せりスパルタ以下その疲弊に乗じて起り交戦十年にしてアテネ市陥り戦争終結を告ぐ(前四〇四)

3. 結果

- 一、テロス同盟解散せられアテネ、スパルタの下に屈す。
- 二、アテネの民主政體の廢止(後に復興)。



15

14

一、スバルタ
二、テーベ
三、マケドニアの争覇

1. スバルタ

一、アベルシア侵入

前三九六年スバルタ軍ヘルシアに侵入す、ヘルシアは財を散じてギリシア列國に説き聯合してスバルタに背かしむ。

二、條約和

イ、小アジアのギリシア殖民地をヘルシアに與ふ。
ロ、ギリシア列國間の同盟を禁止す(前三八七)

一、ベテ市

テーベは一時スバルタに屈服したりしがエバミノンダス、ペロピダス等名士輩出しスバルタ兵を追ふて民主政を確立し終にポイオチア諸市の盟主となる。

二、衰運

レウクトラの役(前三七一年)スバルタ軍を粉碎せる後は名聲四方に轟きしも諸名士前後相つきて没し國勢頓に衰ふ。

3. マケドニア

一、勃興

フィリポス二世風に大志あり(幼時テーベに質たり)即位の後兵制を改めギリシア文化を輸入して急に國力を増進せしむ。

二、列國屈服

前三三八年フィリポス王ギリシア同盟軍をケーロネアに破り列國を屈服せしめて元帥に推さる

アレキサンダー大王の事業

1. 大王の人物

幼時よりギリシアの碩學アリストテレスの薫陶を受け智勇絶倫平生最もホメロスの詩を愛誦したりといふ前三三六年、年二十にして王位に即くや直にギリシア列國の叛亂を鎮め征波元帥となる。

2. 大王の遠征

前三三四年の春征途に上り行く行く小アジア、フェニキア、パレスチナを征し埃及を服し更に東に轉じてヘルシア王大リオス三世とガウメラに決戦すダリオス大敗逃げて其部下に殺さる(前三三一)。

3. 大王の企圖

大王は更に進みて中アジアを征服しインドの北部を攻略して師を旋すやバビロン城を修築し將士に雜婚を勸めギリシア文化を輸入し將に東西領土の人種文化を融合したる一大王國の建設を見んとせしが經營半ならずして病死したり時に前三二三年。

4. 大王國の分裂

一、シリア

アジアに於ける領土の大部を含む其後バルチア、バクトリア、ユダヤ等獨立す。

二、プエトジ

首都アレキサンドリアは形勝の地を占め一時文化の中心たりき。

三、其他

マケドニア、ベルガモン、ボントス等の數小邦分立せり。

一三、ギリシアの文物

2. 學

術

一、文學

イ、詩

ロ、戯曲

二、歴史

1. 特色

ギリシア文物の特色は其機軸の新なるにあり生氣の中に動くにあり調和と權衡とを失はざるにあり蓋しギリシアには個人の自由發達を妨ぐるの專制政治なく秀美なる山川は自然の感化を與へ競技會ありてこれを磨勵し宗教これを調和したるに因る。

詩には叙事詩あり、叙情詩あり、詩聖ホメロスの詩の如きは尊重せらるること經典の如し。

戯曲にはエスキロス、ソフォクレス、エウリピデス(以上悲曲)アリストファネス(喜曲)等何れも古今獨歩の稱あり

史家にてはヘロドトス(歴史の父)ツキヂデス等出づ。

3. 美

術

4. 宗

教

三、哲學

術

三、哲學

哲學にはソクラテス(哲學の祖)、プラトン、アリストテレス(論理學の開祖)の三哲出でたり。

美術家建築家としてはフィヂアス(彫刻家)イクチノス(建築家)の如き名人出て共にバルテノン堂の建築に與る。

多神教(自然崇拜)なり最上の神ゼウスをオリンピアに奉祀し四年毎に大祭を執行す列國は皆これに人を遣りて競技を演ぜしむこの競技とアンフィクチオン同盟(アポロ神に事ふる)とは常にギリシア人をして協同一致の念を起さしむる動機たり。

一四、ローマの世の初

1. ローマの起源

在昔イタリアに住せる種族

- 一、エトルスキ(北).....の村落
 - 二、イタリア(中).....の村落
 - 三、ギリシア(南).....の村落
- ローマ市(前七五〇頃)

2. 政治組織

- 一、王政時代
 - 人民は貴族平民の二階級に分れ貴族のみ政權を握りたるにより貴族平民の軋轢を生ず
 - 統領二人を置き(前五一〇)餘は變更なかりしが平民次第に權力を伸べ護民官を設け民會を設く。
 - 政治機關
- 二、共和時代
 - 人民は貴族平民の二階級に分れ貴族のみ政權を握りたるにより貴族平民の軋轢を生ず
 - 統領二人を置き(前五一〇)餘は變更なかりしが平民次第に權力を伸べ護民官を設け民會を設く。
 - 政治機關

3. ガリ人の侵入

前三九〇年ガリ人(ケルチ種)入寇しローマを焚掠す爾來前後三回の侵入ありたれど皆之を撃退しローマ國運發展の基成る

ハラキノ

一五、ローマのイタリアの統一

1. 中部の征服

ローマ人はガリ軍を破れる勢に乗じて四隣の敵に當り前二九〇年頃には中部イタリアの平定を終れり。

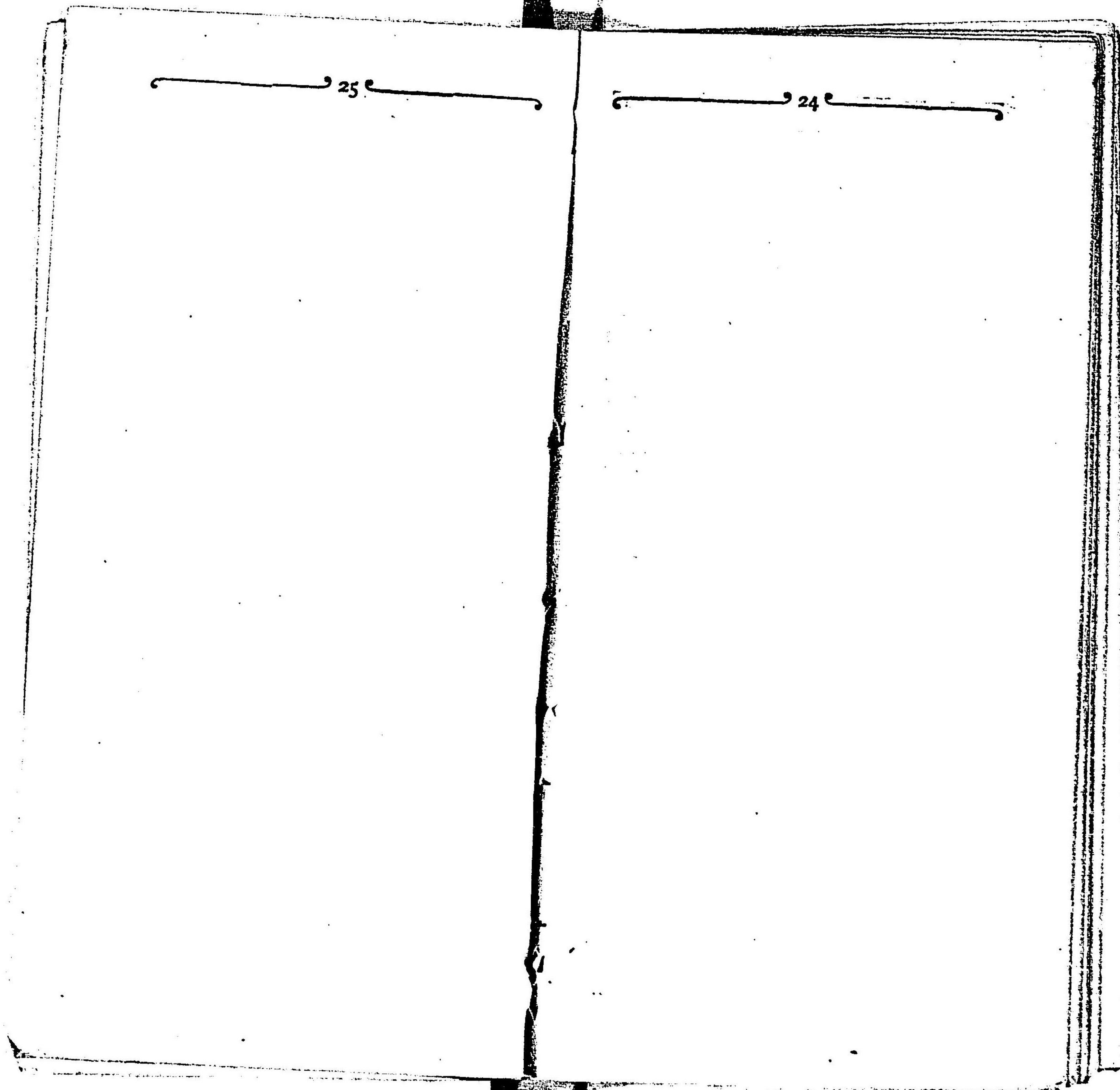
2. 南部の征服

- 一、原因
 - タレントゥム(ギリシア殖民地)ローマと事を構ひ援をエピロスの王ピロスに求むピロス乃ち軍を率ゐイタリアに上陸す(前二八〇)
 - ローマ軍不屈不撓の勇を振ひて之に當る偶シラクサイも亦難をカルタゴと構ひ援をピロスに請ふ、ピロス因りてシチリア島に渡りカルタゴ軍を破りしがローマ、カルタゴの同盟成りたるを見再びイタリアに轉戦し大敗して歸國せり。
- 二、戦記
- 三、結果
 - 前二七二年タレントゥム陥り南部全くローマに歸す。

3. 北部の征服

前二三五年ガリを征伐し北部イタリアを併す。

エピロスの寇



25

24

一六、ポエニ戦争

1. 原因

カンパニア傭兵がシラクサイの撃攘する所となり救を同時にローマとカルタゴとに求むこれ終に兩者衝突の因となる。

2. 第一役

戦争の初期はローマ方の不利に歸せしが新案の設備を戦艦に施し前二四一年カルタゴ艦隊を全滅せり(前二六六―同二四一)。

二、結果

イ、ローマは償金とシリチア島とを得。
ロ、カルタゴの制海権地に墜つ。

3. 第二役

一、戦記

前二一八年カルタゴの名将ハンニバル、イスパニアよりイタリアに侵入し連戦連勝前二一六年大にローマ軍をカンネーに破る然るに事志と違ひ本國援を與へず外國聯合の策亦成らざりき。
ローマの名将スキピオは虚に乗じてイスパニアを略し進んで其本國を衝く前二〇二年兩名将ザマに決戦しカルタゴ軍大敗して左の大屈辱を受く。

スキピオ

ハンニバル

一七、ローマの外國征服

4. 第三役

一、原因

ヌミヂア王のカルタゴ領侵略事件起り前二四九年ローマはカルタゴの軍艦武器を没收し且つ海岸を去る數里の地に移轉せんことを迫る。
包圍三年の後街戦六日兵火十七日に亘り生存者は奴隸に賣られカルタゴ全亡(前二四六)

二、結果
イ、イスパニアの割讓、償金の支出、軍艦の制限。
ロ、ローマの許可なくして宣戦、媾和することを得ず。

1. マケドニア

一、征服の事情

マケドニア王フィリポス三世、シリシア王安テオコス三世と同盟しエシプト、ベルガモン、ロイドス等の諸小國を侵略せんとせり諸國其陰謀を知り救をローマに請ふ。

二、滅亡

前一九七年宣戦媾和の權を奪はれ償金を徴せられ同二四六年全くローマ領となる(マケドニア)

4. ベルガモン

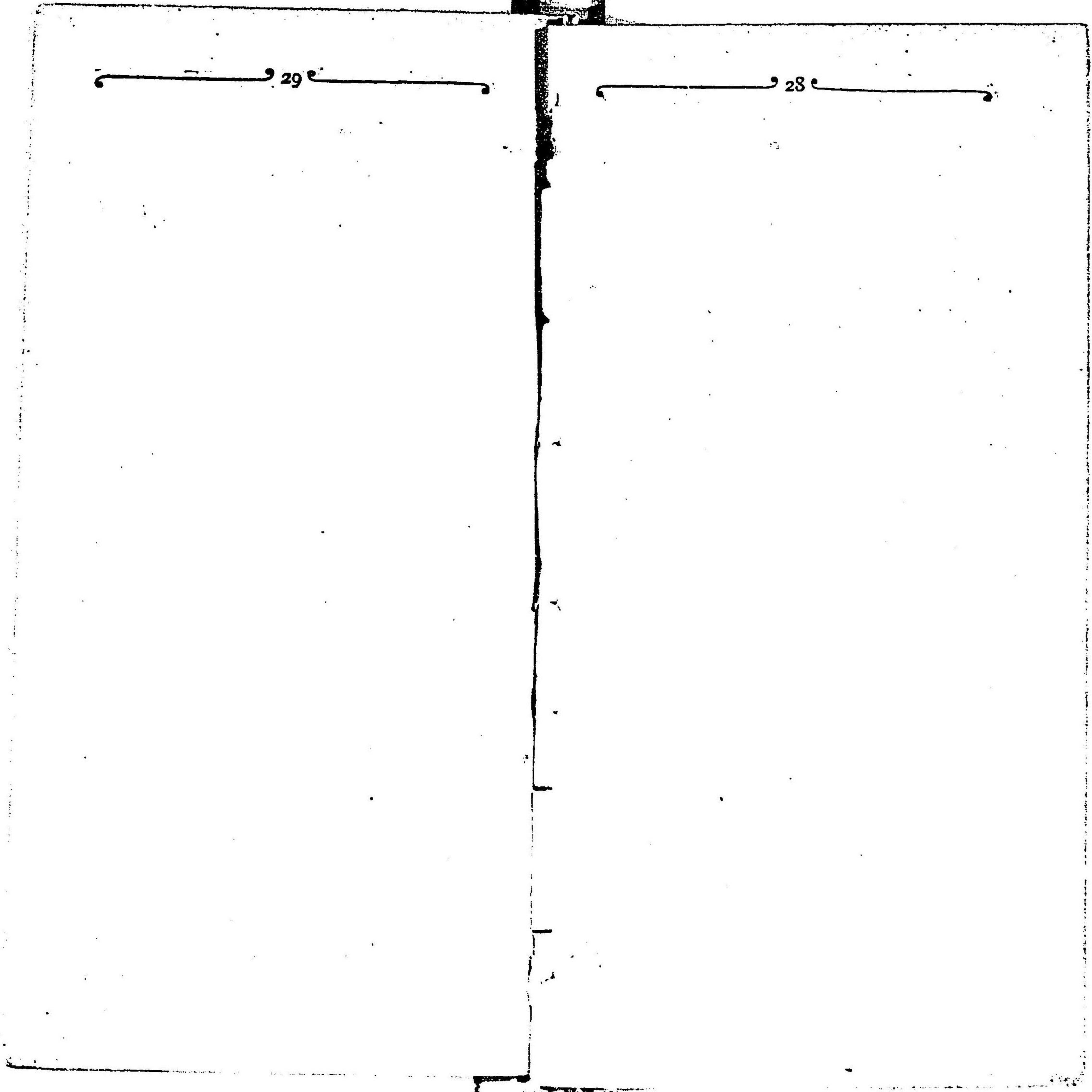
前二一三年ローマのアジア縣となる。

3. カルタゴ

ポエニ戦争の條に出づ(アフリカ縣)。

2. シリア

前一九〇年ローマに莫大の土地と償金とを納れ國大に衰ふ。



29

28

一八、ローマ共和政の腐敗

1. 外征の結果

ローマの外國征服は表裏二様の結果を生じ未曾有の紛亂を醸すに至れり、一、版圖の擴張、富の増加、東方文化の輸入、二、奢侈の増長、道徳の腐敗、貧富の懸隔。

一、グラックスの騒動

グラックス兄弟は深く閥族の跋扈を慨し私に弊風を一掃するを以て已の任となせり其相つぎて護民官となるや土地の分配門閥の抑制に心力を傾けしが兄弟共に富者黨の殺害する所となる。(前一三三—同—二二)

二、ウマスリ

前一〇七年ヌミヂア征討の事あり平民出身のマリウス(後の貧民黨首領)統領となりて之を平定し(ユグルタの亂)又ゲルマニの侵入(前一〇二)を防ぎ名聲一時に揚りぬ。

三、内亂

前九一年イタリア諸民族團結して蜂起す市民権を得んがためなり交戦三年遂に市民権を得(富者黨スルラ名を揚ぐ)

2. 内叛

亂

四、ミトラダテスの亂

前八八年ポントス王ミトラダテス、アジア縣を侵し更に進んでギリシアに入るスルラ貧民黨を排して已れ總督となりミトラダテスを破りて償金と軍艦とを徴したり。

五、黨争

スルラの東征中貧民黨起ちて富者黨を慘殺し其財産を沒收すスルラ歸國の後貧民黨を屠りて仇を報じ民會議民官の權を殺ぎ再び其勢力を振へり。

六、内外患

其後内憂外患生じローマは一時危かりしがクラッススは鬪者の亂を平げポンペイウスはイスパニアの反を鎮め海賊を掃蕩し更に遠くポントスを征して(前六六)之を併せアルメニアを降してポントス、シリヤの二縣を置きユダヤを攻めて朝貢國とせしかば内外始めて事なきを得たり。

ポンペイウス

一九、ケーザル

1. ケーザルの人物

ケーザルは將軍、政治家、法學者、歴史家、數學家、辯舌家、建築家の才を兼備し、而かも度量廣く膽力多かりき其貧民黨に入るや深くマリウスに愛せられ後推されて首領となる。

2. 第一、三頭政治

閥族等のポンペイウスを疎んずるを見前六〇年ケーザルはポンペイウス、クラッスス(富豪)の兩人と結びて第一、三頭政治を組織す。

3. 北方略

前五八年ガリアの征討の途に上り同五五年進んでゲルマニを討ち更にブリタニアを征し征途に在るものすべて八年文化を蠻地に扶植しゲルマニの南進を拒ぎたるの功真に偉大なり。

4. 兩雄の衝突

前四九年ポンペイウス、ケーザルの盛名を忌み突然ケーザルを召還したり茲に兩雄の衝突を起しケーザルは奮然志を決してローマに歸りポンペイウス等を追ふて之をギリシアのファ

ルサルス(前四八)に撃破せりポンペイウスは逃れてエジプトに入り土人に殺さる。

5. ケーザルの末路

ケーザルは是よりポントス、アフリカ、イスパニア等の叛亂を鎮め前四十五年ヂクタトルに擧げられインペラトルの稱號を得て君主の實權を握り大に技倆を振はんとせしが經營半ならずるにケーザルの威望を忌む輩(ブルツス等)六十餘人突然起ちてケーザルを政廳に刺殺せり時に前四四年三月十五日。

二〇、ローマの政の(其二)

1. 第二、三頭政治

前四三年アントニウス、オクタウィアヌス、レピッスの三人第二、三頭政治を組織すブルツスの徒倉皇ギリシアに奔る。

三頭政治の不和

前三六年レピッス背きて所領を没收せらる。アントニウスは東方を鎮しけるがエシブト女王クレオパトラの聲色に溺れ狂愚の行多かりきオクタウィアヌス大に怒りて之を伐ち前三年アクチウムの戦に大捷を博しアントニウスとクレオパトラとは翌年相つぎて自殺せり。

2. オクタウィアヌス

一、アウグストゥス

オクタウィアヌスはローマに凱旋してインペラトルとなりアウグストゥスの尊號を受けき帝在位四十四年大に制度を改革し邊備を修め又盛に都城を修築し文學美術を奨勵せしかば文物一時に光を放ちローマ文化の黄金時代を現出したり。

二、シエスバニアヌス

ブリタニアを平げユダヤ人を四散せしむ。(六九—七九年)

二一、ローマの政の(其三)

3. アウグストゥス以後の名君

一、トラヤヌス

ドナウ河以北の地を略し(ダキア縣)アラビアの北部を攻略しバルチアの國都に攻め入れり。

二、アウレリウス

北はゲルマニを撃退し(九八—一〇七年)東はバルチアの一部を併す。

4. 末帝政路

一、軍人の騷暴

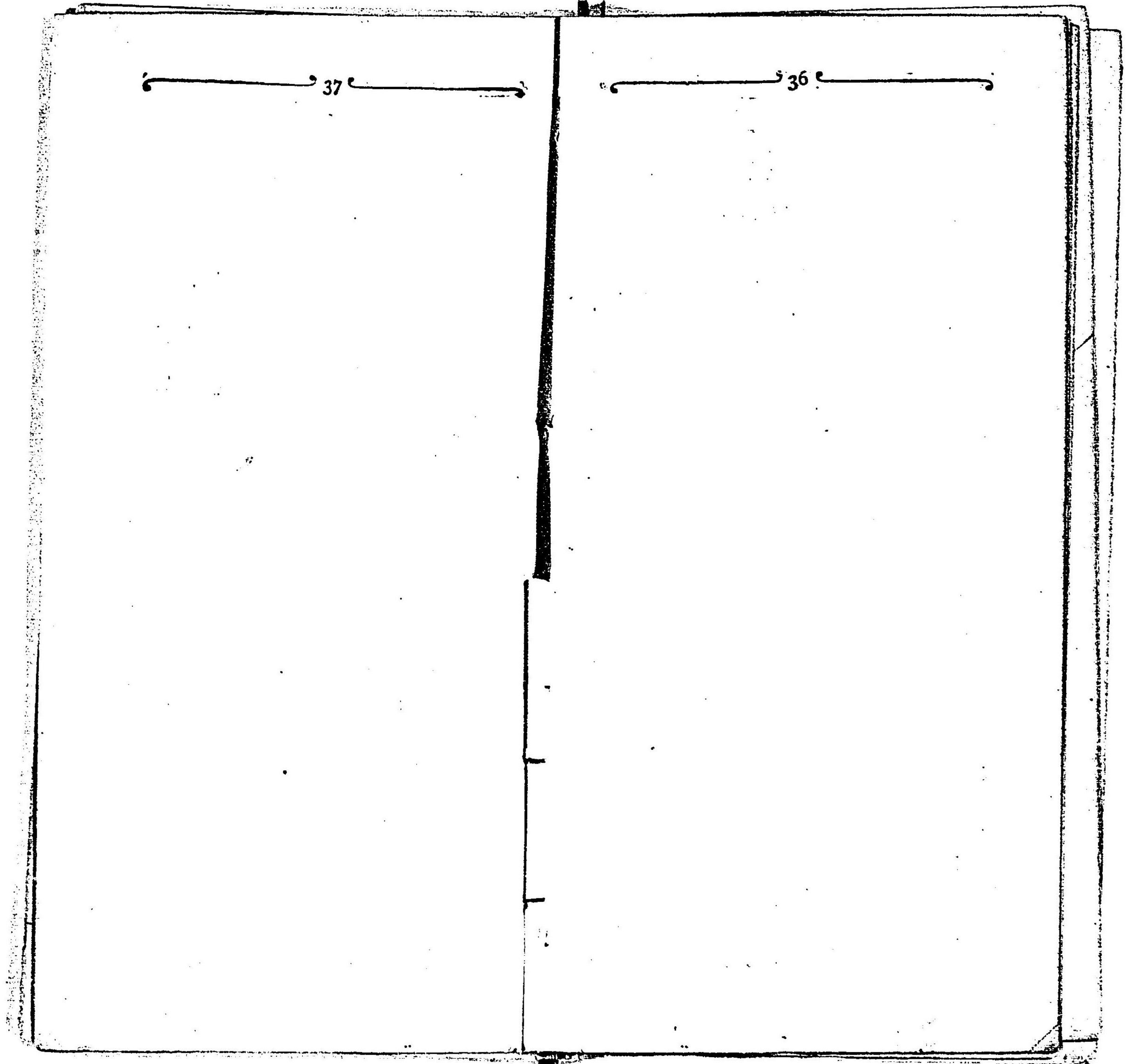
王の廢立一に其意に出て此後廿四帝中非業の最後を遂げざるもの甚だ稀なり。(一八〇—二八四)

二、サザン朝のヘルシア

二八四年オクテチアヌス帝位に即き副帝制度を布けり三二三年コンスタンチヌス帝東西を一統せしが蠻族南下の勢激しきに因り再び分國制を採用す。

三、帝國の分裂

三九四年テシドシウス一世の一統に及び翌年長子アルカヂウスに帝國の東部を次子ホノリウスに其西部を分與しローマは全く東西に分裂し了りぬ。



37

36

二三、キリスト教の弘布

1. キリスト教の起源

キリストはユダヤの地ナザレトに生れ、三十三歳ニ死す。イエス、キリストはユダヤの人なりヘブライの一種教より入りてキリスト教を開きしがローマ官吏は人民を誘惑するものとなし之を磔刑に處したり然るにキリストの高弟等其遺志を承けて布教に力めしかば其弘布甚だ速なりき。

2. 弘布の原由

一、キリスト教の世界的なりしこと。

二、在來の宗教は當時の人心を満足せしむる能はざりしこと

三、ローマ帝の代々加へたりし大迫害(前後十回)の反動。

3. 大會議

コンスタンチヌス大帝の時に至り終に國教となりしも種々の宗派起りて異説紛々たりしかば三二五年ニケーアに宗教大會議を催しアリウス派を排斥してアタナシウス派を正教と認定せり。

二三、ローマの文物

1. 學問

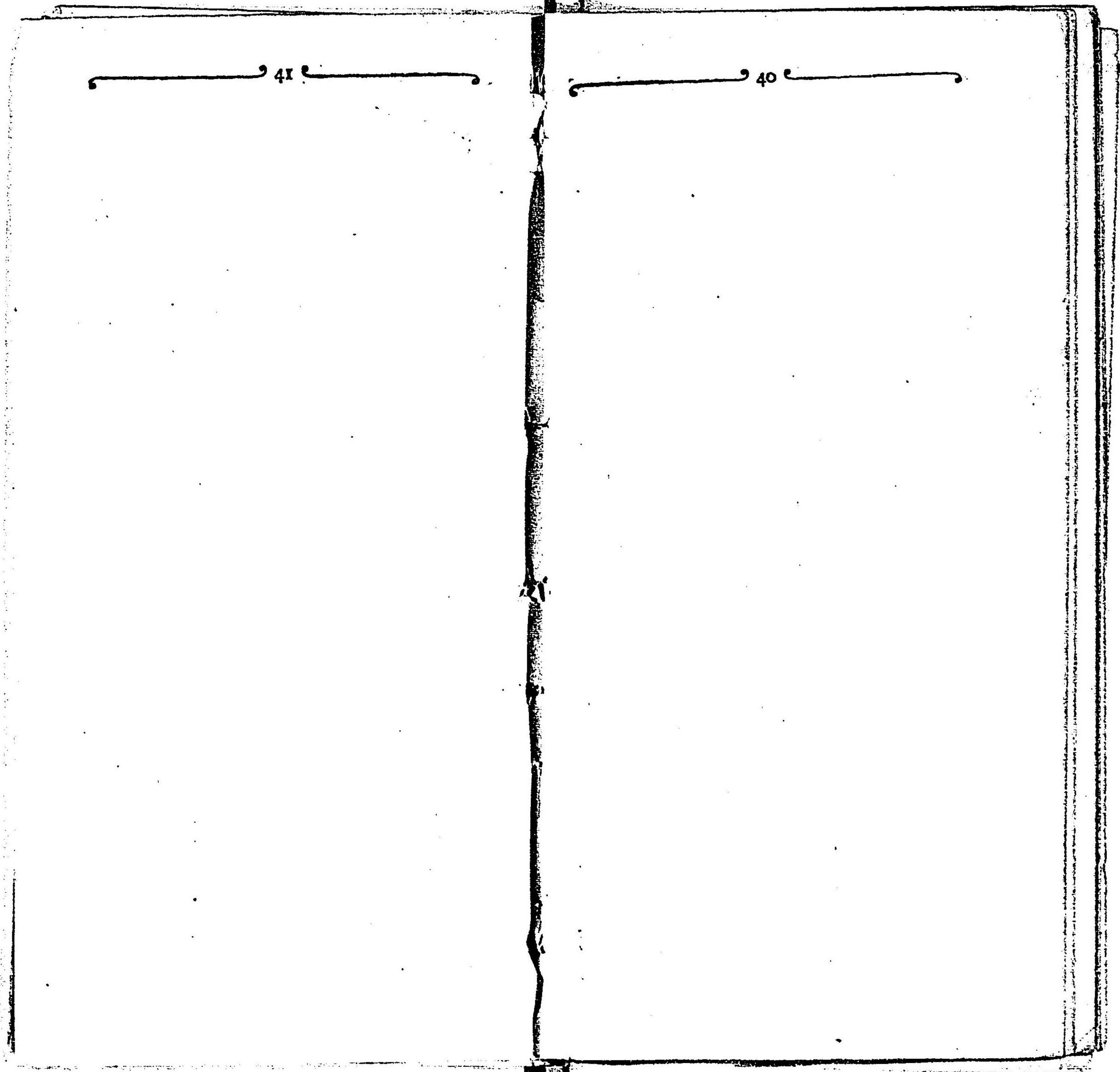
詩人には、ウィルギリウス、ホラチウス出てアウグスツス時代を飾り、歴史家にはケイザル、サルストゥス、タキツス等出てて大家の名譽を得たり辯舌も非常の發達を遂げ殊に法律の發達は特筆すべき價值あり。

2. 美術

建築は宏大なると壯麗なるとを特色とし、殿堂、劇場、浴場、公會所等の如き大建築は今日に残存するもの甚だ多し。

3. 宗教

ローマはもと多神教にして外國征服後は著しく混同したり帝政時代に入りてキリスト教を信奉したることは既説の如し。



41

40

一、種族移轉と西ローマの滅亡

1. ゲルマ民族

ゲルマ民族を細別すれば大略左の如し。

ゴート(東、西) フランク アラマン サクス アンデル
ブルグンド ランゴバルド ワンダル等。

2. 種族の大移轉

一、大移轉の發端
三七五年フン族西侵してゴートを襲ひしに始まる。

ゴートは東西に寇し、フランクはガリア北部にアラマンは今の獨逸西南に、ブルグンドはライオン上流に、ワンダルはイスパニア(後西ゴートに推されてアフリカに入る)に移る。

3. 西ローマ帝の滅亡

四七六年ゲルマニ傭兵の將オドワケル西ローマ皇帝を廢し自立してイタリア王となる。

4. ゲルマの諸王國

一、東ゴート王國
四九三年東ゴート王テオドリッヒ、オドワケルを殺し之に代りて東ゴート王國(四九三—五五四)を建つ。

二、フランク王國
フランク一部の王フロドウィヒ悉く同族を併せアラマンを従ひブルグンド王國(四一五—五三四)を倒し西ゴート王國(イスパニアにあり四一五—七一七)の一部をも略してフランク王國を建つ。

三、アンゲルサクスの諸小國
歐洲北西岸なるアンデル、サクス等四四九年ブリタニアに入りブリトン人(ケルチ種)を征して七小國を起せり。

上古史中古史に見えたる人種

- 1. ハム種……エジプト人、アラビア人。
- 2. セム種……アッシリア人、バビロニア人、ヘブライ人、フェニキア人、キタ人。
- 3. アーリ種……メデア人、ベルシア人、リチア人、マケドニア人、ギリシア人、イタリア人、アルメニア人、ゲルマニ(ノルマンを含む)スラブ(ブルガリ人、ロシア人、ポーランド人)。
- 4. 蒙古種……ケルチ(ガリ人、プリアタニア人)。
- スキタ人(?)、エトルスキ人(?)、マジヤル人、バルチア(スキタ族)人、フン人、ボロフツィ人(突厥種)、セルジユク、トルコ人、オスマンリトルコ人、ホラスム人。

45 三、東ローマとベルシア

- 1. ユスチニアス帝……五二七年ユスチニアス帝即位す、(五二七—五六五)、帝の事業の大略は、
 - 一、内治
 - イ、ローマ大法典の編纂、
 - ロ、宗教上の異説を断じて大に布教に力む、
 - ハ、支那傳來の蠶業を奨励す、
 - ニ、都城の修築。
 - 二、外征
 - イ、ベルシアを征する事二回、
 - ロ、アフリカのワンダル王國(四二九—五三三)を併呑し、
 - ハ、東ゴート王國を滅す。
- 2. 東ローマとベルシアの交渉……ベルシアはホスロー一世及び二世の頃は國勢頗る張り二世の時東ローマ帝國に侵入して國都を圍めり皇帝ヘラクリオス之を撃退し反りてベルシアの國都に迫る是に於て和議成りしも兩國衰弱しサラセン國に興起の機會を與ふ。

ホスロー一世 同二世

四、サラケン

1. 回教の起源

回教の開祖ムハメッド(五七一―六三二死)はまたサラケンの國祖にして元メッカの一隊商なり四十才の頃初めてイスラム教を唱へしが國人之を信ぜざりき、六二二年(回教の元年)メデナに逃れ此に多くの信徒を得、歸りてメッカを陥れ漸次全アラビアに及ぼせり。

2. サラケン帝國

一、ハアリ ムハメッドの繼承者はハリファと稱し經典、朝貢、劍の三者を以て異教徒に臨めり。

二、サラケンの膨脹は大略下の如し。イ、六三五年にシリア、ロ、六三七年にエルサレム、ハ、六四一年にペルシア(ササン朝滅亡)エジプト、ニ、七〇〇年頃にはアフリカ北岸、地中海の諸島、西ゴート王國(七一―七二七)を併呑し、ホ、七三二年フランクに入りフランクの宮相カロロマルテルに撃退せらる。

3. 帝國の分裂

一、東サラケン 七五五年東西に分裂し東はアッバス家君臨しハルン・アル・ラシド、及び後嗣マムンの兩代(七八六―八〇九)は極盛の世なりき一二五八年蒙古族に滅さる(都バクダード)。

二、西サラケン 西(七五六一―四九二)はオンマヤ家君臨し(都コルドバ)九世紀より十世紀に亘りてアブデルラーマン三世ハケム二世の如き賢君出てて學問藝術の淵藪たりき。

4. サラケンの文化

東西のサラケン朝は競ひて商工業を振興し學術技藝の發達を圖りしに因り文物の進歩實に驚くべき者あり特に學術の如きは近世科學の淵源となり現今行はるアラビア數字は全くサラケン人の創意に成るといふ。

48. 五、ギリシア帝
法、國とローマ王

1. ギリシアの名稱

名稱の起因は、一、ヘラクリオス帝死後國勢衰へて全くバルカン半島内に退縮せり、二、専らギリシアの言語習俗を採りせり。

2. 法王の起源

一、キリスト教の大僧正等にはもと上下の別とては無かりしにローマの大僧正には俊傑相つぎて出て布教に心力を傾けたり。
二、四ローマ没落の後には常に其威徳を以て諸民族の紛議を治めし故法王の現出を見るに至れり。

3. 正教の分裂

一、原因
一、コンスタンチノブルの大僧王は法王の下位に甘んぜず。
七二六年ギリシア皇帝レオ三世偶像崇拜の禁令を出したりしに法王グレゴリオ二世極力反對しコンスタンチヌス五世はフランクの宮相ビビンと結託して獨立を維持せり。
二、分裂…一〇五四年ギリシア教會ラテン教會の二となる

49. 六、カロロ大帝の事業

1. フランクのカロリಂಗ朝

始祖ピピン法王の助力によりて七五一年王位に上る王は法王を徳としランゴバルドの地を征して法王の始に獻す。

2. カロロ大帝

一、外征
ランゴバルド王國(五六八―七七四)を滅しサラセンを討ちゲルマニを征しスラブを懲しノルマンを退げ征戰五十二回に及ぶ。
二、西ローマの復興
八〇〇年(耶蘇降誕の日)西ローマ皇帝の冠を加へられ西ローマ帝國再興す(法王レオ三世の時)大帝は一代の名君にして郡縣の制を布きて領土を固め學者を招きて學校を興し又法律を改正し産業を保護し宗教を弘布したる等中古のヨロツバに貢獻する所頗る大なり。

3. フランクの分裂

一、大帝の孫ロタールは帝號を稱し中部及びイタリヤを領す。
二、ルイス(ロタールの弟)は東部を領す。
三、カロロ(ルイスの弟)は西部を領す。
四、ロタールの死後中部は東西に分割せらる(八四三)條約

4. ドイツの起源

ノルマンの入寇に際し東西一時合併せしが八七七年東はアルヌルフを立て西はオドーを立て、王とし東西全く分離す

七、ノルマン

1. ノルマンの起源

ノルマン人はゲルマニ民族に属し、スカンヂナヴィア、デンマルク等に住し九世紀の初めより南下して抄略を事とせり。

2. スフラン侵入

九世紀頃より入寇せり九一一年其侵畧に堪へずノルマンの酋長ロロをノルマンディー公に封じたり。

3. スイギリス侵入

デーンと稱するノルマン九世紀の初頃より來侵し一〇一六年其王カヌート大王イギリスを併呑す一〇四二年一旦舊王統の再興(エドワード王)となりしが一〇六六年ノルマンディー公ウィルヘルム入りてイギリス王となる。

4. イタリア侵入

ノルマンは地中海にも現はれ(九世紀)十二世紀に至り其酋ロジエロ南部イタリアとシチリアとを畧しナポリ王國を建つ。

5. ロシア侵入

八六二年ノルマンの酋長ルーリック、ロシアに入りてスラフ人を従ひノブゴロドに都し現代ロシアの起源を作れり。

6. アメリカ侵入

九世紀の末にはイスラランドに殖民し十世紀にはグリーンランド及びアメリカに殖民したりといふ。

八、神聖ローマ皇帝とローマ法王

1. ドイツ王の選挙

ドイツにては九一年カロリング王統断絶のため五大諸侯互選によりて國王を選擧することとなる。

2. 神聖ローマ皇帝

オット一世(九三六—九七三)王位に即く英邁にして大志あり内諸侯を抑制し外マジアル人スラフ人を征服し又イタリアを平定しぬ九六二年自らローマに行き皇帝の冠を受け神聖ローマ皇帝と稱す(以後定例となる)。

3. 皇帝と法王の衝突

一、衝突の原因

皇帝法王の權威共に増長し來り一方は政治上より他方は宗教上より各々四ヨーロッパを統一せんとの大野心ありしに基づく。

一〇七三年グレゴリオ七世法位に上る法王は法王を各國君主の上に置かんと理想を固持し寺院の改革を勵行し終に僧官の皇帝の認可を受るを禁じたり

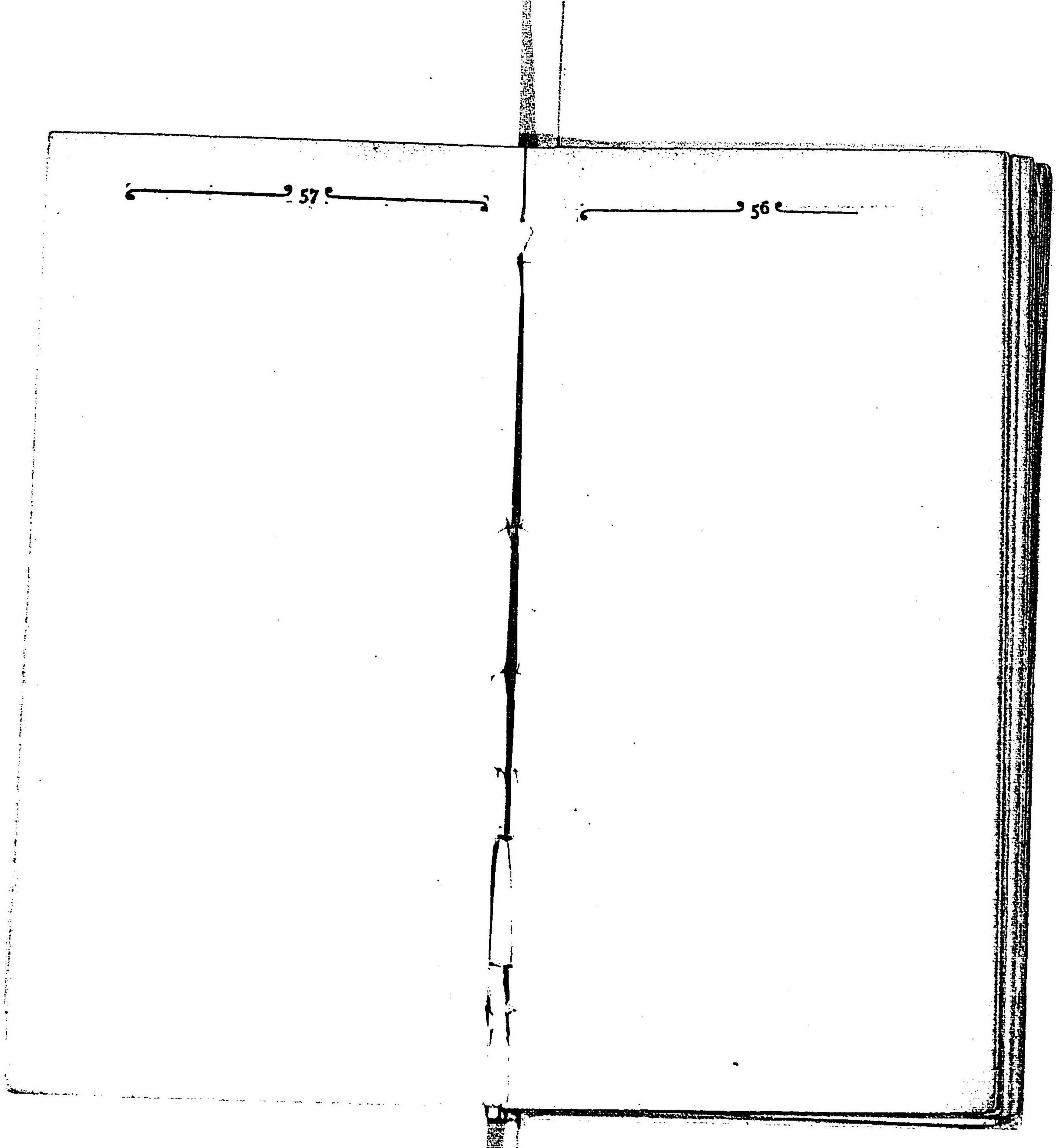
4. 黨争

5. 法王の盛衰

時に皇帝ヘンリ四世位に在り法王の侵權を怒り法王を廢せんとし却りてカノサの大屈辱を受けしが少くして皇帝の勢力挽回し法王廢立の目的を達せり

皇帝法王の軋轢は年と共に甚しく一一三八年コンラド三世の時よりはゲルフ黨(法王方)とギベリン黨(皇帝方)と起り次代フレデリキ一世(赤髯)の後は黨争愈加はりて無政府の状態となりさては空位時代(一二五六一—一二七三)を現出するに至りぬ。

黨争の激しきに當りローマにては法王インノケント三世(一一九八—一二二六)出て巧みに内亂に干渉して法王權の極盛時代を作爲せしかど其後遺志を繼ぐべき英主なく保護を托すべきの皇帝もなくドイツの衰頹と共に權力衰へたり。



57

56

九、イギリスと
フランスと

1. フランスの
権伸長

2. スイ
政の
憲

フランスは九八七年フーゴー、カペー王となりて、カペー朝を
始め子孫其後を承けて王権を伸張せり。

一、市府の力を借りて諸侯を抑へ、二、断絶したる諸侯の領
地を没收し(十字軍の結果)、三、フランスにある英領の過半
を奪ひ(一二〇四年フィリポ二世)、四、アルピ地方の異教徒
を征して其領土を併せ(一二二九年ルイス九世)、五、フィリ
ポ四世(一二八五—一二一四)の時に至りては法王ボニファキ
オ八世を廢して法王を左右せり。

一、一五四年ヘンリー二世即位領土一時に膨大せしがジョン王
に至り王權頓に衰へ立憲制を採用するに至る其次第は
一、佛王フィリポ二世のために領土を奪はれ、二、法
王インケント三世と争ひて歳貢を納れ、三、一二
一五年諸侯僭僭等のために大憲章の署名を強ひられ
四、一二六四年シモンド・モントフォル等王に抗して
議會を開かしむ。

3. 百
年
戦争

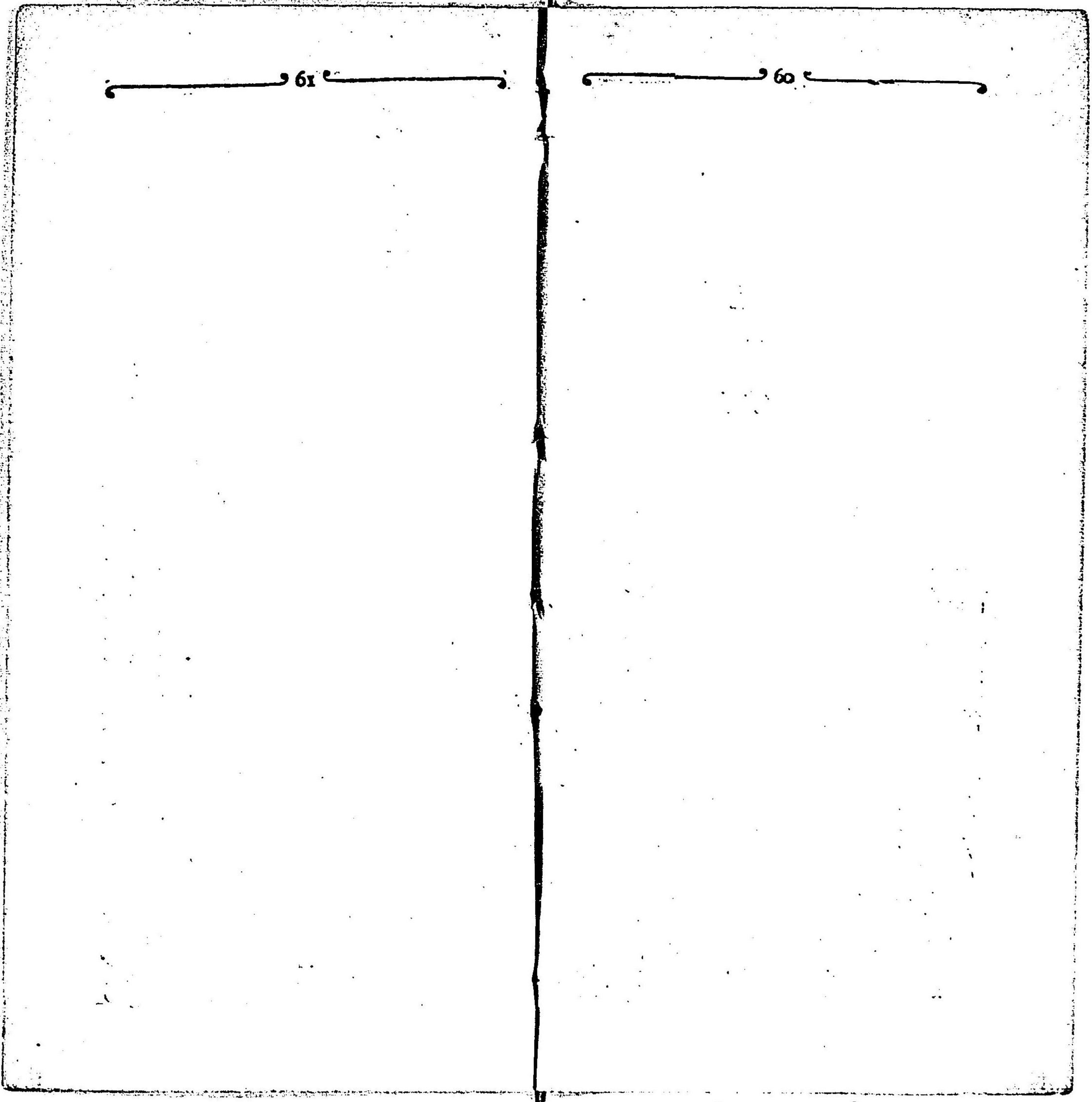
一、原因

二、戦
記

イ、... 英王エドワード三世國勢を張り(スエッ
トランド、アイルランドを併す)領土の
關係より佛王に下るを肯せざりき。
ロ、... 一三二八年佛王フィリポ四世の男統絶え
たるにより英王エドワード三世は相續
權我にありと主張せり。

(註)... 一三三九年開戦—一四五三年終止。
戦争の初期は全く英軍の勝利に(クレシ
の戦一三四六年、ボアチエーの戦一三
五六年)歸し佛王ジャンは隣にせられ
一旦和を結ぶ。
佛王カロロ五世は英軍の侵地を回復し敵
國の海岸に迫りしが其後兩國共に内訌に
苦しみき英王ヘンリー五世出づるに及び
アゼンクールの大戦(一四一五)あり佛國
領土の大半復英領となれり。
佛王カロロ七世は僅にオルレアン城を保
ちしが少女ジャンヌ・ダルクを唱へて英
軍の圍を解きしかば佛軍の士氣大に振ひ
終に英軍を國外に驅逐することを得たり

後期 中期 初期



61

60

一〇、十字軍

1. サラケンの衰頹

東サラケンはマムンの後衰頹に赴き十一世の中頃セルジウクトルコ、ハリファ朝の實權を握り其領土西アジアの大部を占めき西サラケンも漸次衰微して同世紀の末には數多のキリスト教國起り領土著くし縮小せり。

一、原因

- イ、…トルコ人は耶蘇の聖地を潰し又巡禮者を虐待せり。
- ロ、…ギリシア皇帝トルコ人の侵入に苦しみ授を法王に求む。
- ハ、…フランスの僧ベテロ實況を視察し聖地の回復を公衆に訴ふ。
- ニ、…法王ウルバノ二世僧侶をクレルモンに會して出征を議す。
- 第一次、佛國の諸侯伯數十萬の兵を率ゐて東征し遂にイエルサレムを陥れイエルサレム王國を建設す。

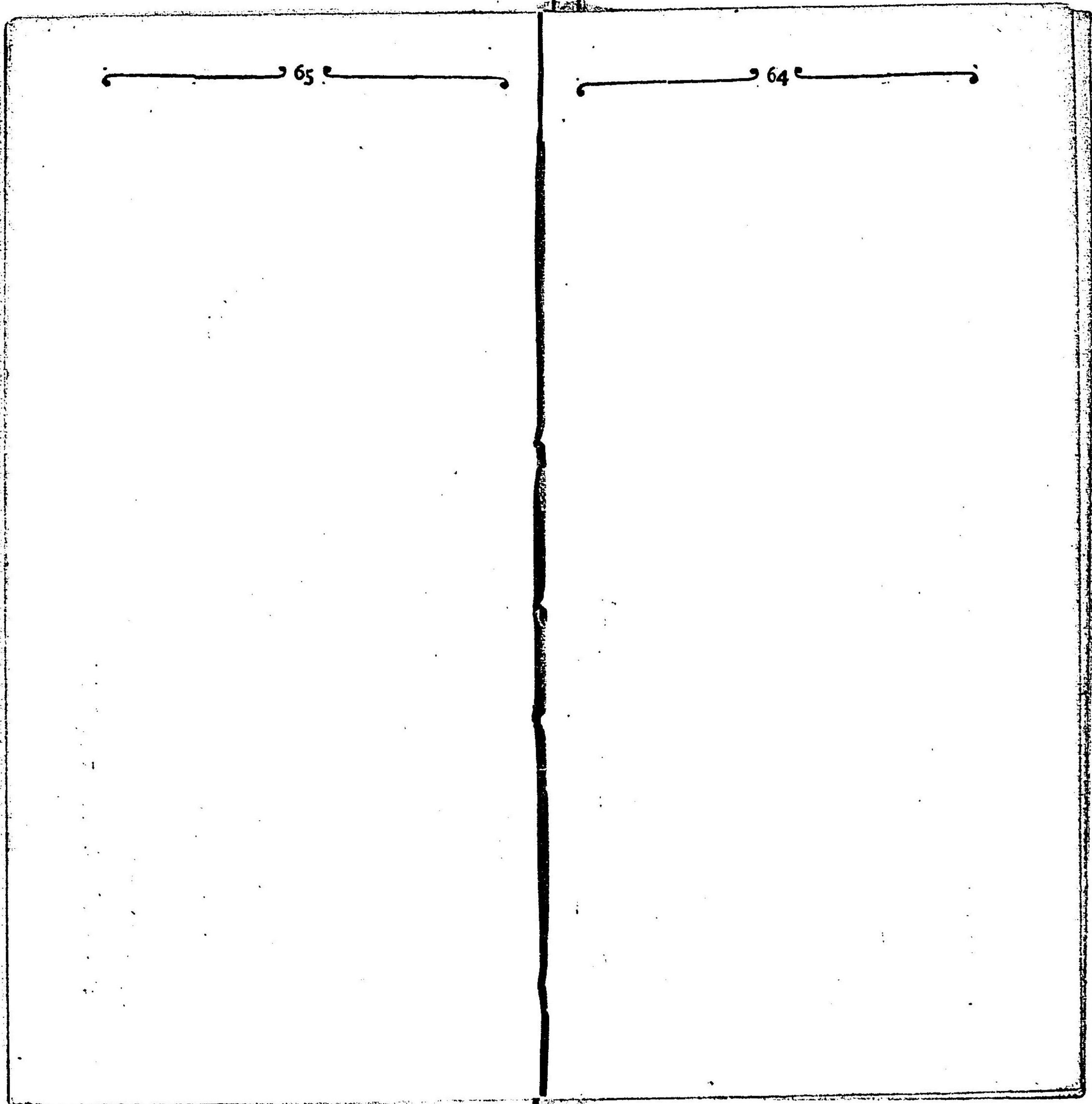
2. 十字軍

二、出征

- 第二次、ドイツ、フランスの帝王以下諸侯從軍し効果を收めずして歸る。(一二〇二—一二〇四)
- 第三次、レム王国を滅すドイツ、フランス、イエルサレムの帝王諸侯十字軍を起し僅にアッカを占領す。(一一八九—一九二)
- 第四次、法王インノケンツ三世の命により諸國の武士出征せしがギリシア帝國の内訌に干渉して目的を果さざりき。(一二〇二—一二〇四)
- 第五次、第五次に一旦イエルサレムを回復せしも其後ホラスム人のために亡ぼされぬ(一二二八—一二二九)第六第七共に効なかりき。

三、結果

イ、封建制度の衰頹、ロ、武士道の發達と宗教的武士團體の發生、ハ、市洋より將來せる新觀念の結果として文化の進歩、ニ、通商航海の盛大と市府の興隆。



1. 封建制度

一、主従関係
 一、貧者の豪族に投じて主従の義を結べる者。
 王侯又は高僧の封土を受けて従臣となる者。

ハ、私有地を強者に捧げて主従の関係を結べる者。

イ、主君に戦役に従ひ、ロ、主君の大禮に参し、
 ハ、軍資の献納。

二、從臣の義務

大陸にては主従の關係は單一なりしも、
 (註)イギリスにては諸侯の從者は同時に王の從者たりき。

2. 武士道

一、武士の教育

武士は幼時より王侯貴婦人に侍して禮節を修め次に武士の從士となりて武技を磨き然る後嚴重なる宣誓式を経て武士となれり。

二、中古に於ける西ヨーロッパの社會

3. 産業の狀態

三、武士の本領
 武士は神を敬し君に忠に弱きを助け強を挫き婦人を敬愛するを以て其本領としたり。

中古農工は非常なる壓抑を蒙り農民は殆ど地主の財産と見做され工業も領主の需用品を製作するに止まりしが市府の商人のみは屢々冒險を試みて奇利を得富裕に赴くと共に献金して種々の特權を得十字軍起るに及びては諸侯の軍資を供して土地を買ひ(自由市)商業の振興につれて愈々繁昌せり。

4. 市府の聯合

市府の聯合は其目的各自共同して其權利を保護するにあり其大なる者を擧ぐれば、
 一、イタリアのランゴバルド聯合、二、ドイツのハンザ聯合、三、ドイツのライン聯合、四、ドイツのスワビア聯合。

一三、モンゴルの西侵

1. 東ヨーロッパの形勢

一、ラテン帝国

第四次十字軍の時ラテン帝国建設ありギリシア帝国の餘類は小アジアに移りしが一二六一年ギリシア帝国を再興せり。

二、キエフ朝のロシア

ロシアは九八八年ウラヂミル、ギリシア皇妹を納れて切りにギリシア文化を輸入せしが其子ヤロスラフを経て國內分裂す。

一、テムチンの西征

オノン河畔のモンゴルの酋長テムチンはチンギスハンと稱し西征してホラスムを滅し其部將チェベ、スブダイの兩人を遣して更に南露に入らしむロシアの諸侯は聯合してポロツフイ人を助けしも却りて大に敗られポロツフイ人終に屈服す(一二三四)。

2. モンゴルの侵入

二、パツの西征

テムチンの孫パツは一二四〇年ロシアを侵畧しモスクバを一炬に付しキエフを屠りポーランドを蹂躙し長驅してドイツに入りしがオゴタイの計音來るに會し軍を旋す。
欽察國

三、フラグの西征

テムチンの孫フラグはベルシアを征し一二五八年バグダードのハリファ朝を滅しイラン國を建設せり。
イラン國

(附) テムチンの第二子チアガタイはチアガタイ國を建つ。

一三、オスマン
コリの侵入

1. オスマン
コリト

オスマンリトルコは元裏海の東に住せり十三世紀に小アジアに入りムラド一世(トルコの祖)の代にはギリシア帝國を侵略して都をアドリアノブルに定め(一三六五)パヂャシッド一世は一三九六年四ヨーロッパ諸國の聯合軍を破りて歐洲を震懾せしめ殆ど全バルカン半島に威を振へり。

2. チムル
レク

チムル・レンクはチンギスハンの汗なりギリシア皇帝の請に應じ大舉してトルコに入り一四〇二年パヂャシットとアンゴラに激戦の後之を擒にすればトルコの勢一時衰へたり。

3. キブチ
アク
滅亡

チムルの勢力は又一時キブチアク國の衰勢を支へしが其再び衰ふるやモスクバ大侯イバン三世奮然起ちて之を滅す(一四八〇)イバン三世はまたギリシアの皇女を娶りて帝國の繼承者に擬したりしがイバン四世に至り始めてツァールを稱せり。

イバン三世

4. ギリシア
の滅亡

トルコは其後勢力を恢復しムハメット二世に至りコンスタンチノブルを重圍の下に置くこと五十三日火器を用ひ城壁を破壊して之を陥る時に一四五三年五月。

1. 新武器の影嚮

一、ハレバルデ

イ、戦術の變

スウイス人はハレバルデ(武器)の發明と新案の戦法とにより巧に武士の最後の突貫を破れり。

ロ、スウイスの獨立

スウイス人は右の利器と戦法により一三八六年センバハの大戦にオーストリア軍を破り獨立の基礎を固めたり。

ハ、兵制の變

歐洲諸國はスウイス人を備ひて軍隊を組織し又之に倣ひて兵士を訓練せり。

二、火器

火器はハレバルデと共に兵制の革新を促し武門を衰微せしめ常備軍隊をして封建制度に代らしめたり。

三、フランス

フランスは百年役の後財政を釐革し常備軍を設置して諸侯を抑へ(カロロ七世)諸侯の男系絶えたる者の領地を没收し(ルセ)

中古末期の歐洲に於ける諸國の形勢

2. 諸國の形勢

一、イギリス

イギリスの中央集權を確實にしたるは、イ、蓋役にて貴族の絶滅せるもの多くロ、ヘンリ七世が強く貴族を抑へ、ハ、國民の平和を希望せるに由る。

二、イヌア

イ、一四六九年のカスチリア、アラゴンの合併、ロ、一四九二年のグラナダの平定、ハ、國王武士團體の首長となり、ニ、同盟諸市を助けて貴族を抑壓す等の數因に由る。

三、ポルチガ

ポルチガもカスチリアの屬國たりしが一一四〇年獨立しジョン二世に至りて王權漸く振ふ。

ルドルフ帝の死後又々皇位相續の争ありしが諸侯等會議を開き皇帝は七大諸侯に金詔

五、ドイツ

六、イタリア

て選出すること（一三五六カロロ四世の
 金詔によりて決す）に決したり其後マキ
 シミリアン一世（ハブスブルグ家一四九
 三即位）帝位に登り相繼によりて領土を
 擴大しオーストリア公を兼ねたり。
 イタリヤはルドルフ帝の時放棄せられ紛
 擾の末ミラノ公領フィレンツェ共和國ベ
 ネチア共和國法王領ナポリ王國の五國起
 れり然るに一四九四年イタリヤ戦争起リ
 ナポリはイスパニアにミラノはフランス
 の手に落ちたり。

マミ
 シミ
 リア
 一世
 五國
 獨立
 イタ
 リア
 戦争

地理上の発見

1. 磁石の應用

磁石は元來支那傳來の者なるが第十二世紀の末に其用法明かになり直に航海に應用せられて地理上の発見に多大なる利便を興へたり。

一、十字軍の結果として地理上の智識著しく増加せること。

二、マルコ・ポーロ イタリアの人マルコ・ポーロ一二五五年より元朝に事へて東洋を歴遊し歸國の後「東洋紀行」を公にしたるにより益々冒險遠征の精神を鼓舞したりしこと。

三、航海獎勵…ポルチガル王ヘンリが航海を奨励したりし事

一、印度航路発見 一四八六年バルトロメオ・ヂアス喜望峯を発見し次ぎてバスコダ・ガマ(一四九八)アフリカを迂廻してインドに達せり。

2. 発見に至る事情

3. 発見

三、新世界発見 イタリアの人キリストホロ・コランパス固く世界圓形説を信じイスパニア女王イサベラの助を得西方に直航して西印度諸島を発見せしが(一四九二)其後探險家續々西航し終にアメリカ大陸の発見となれり。

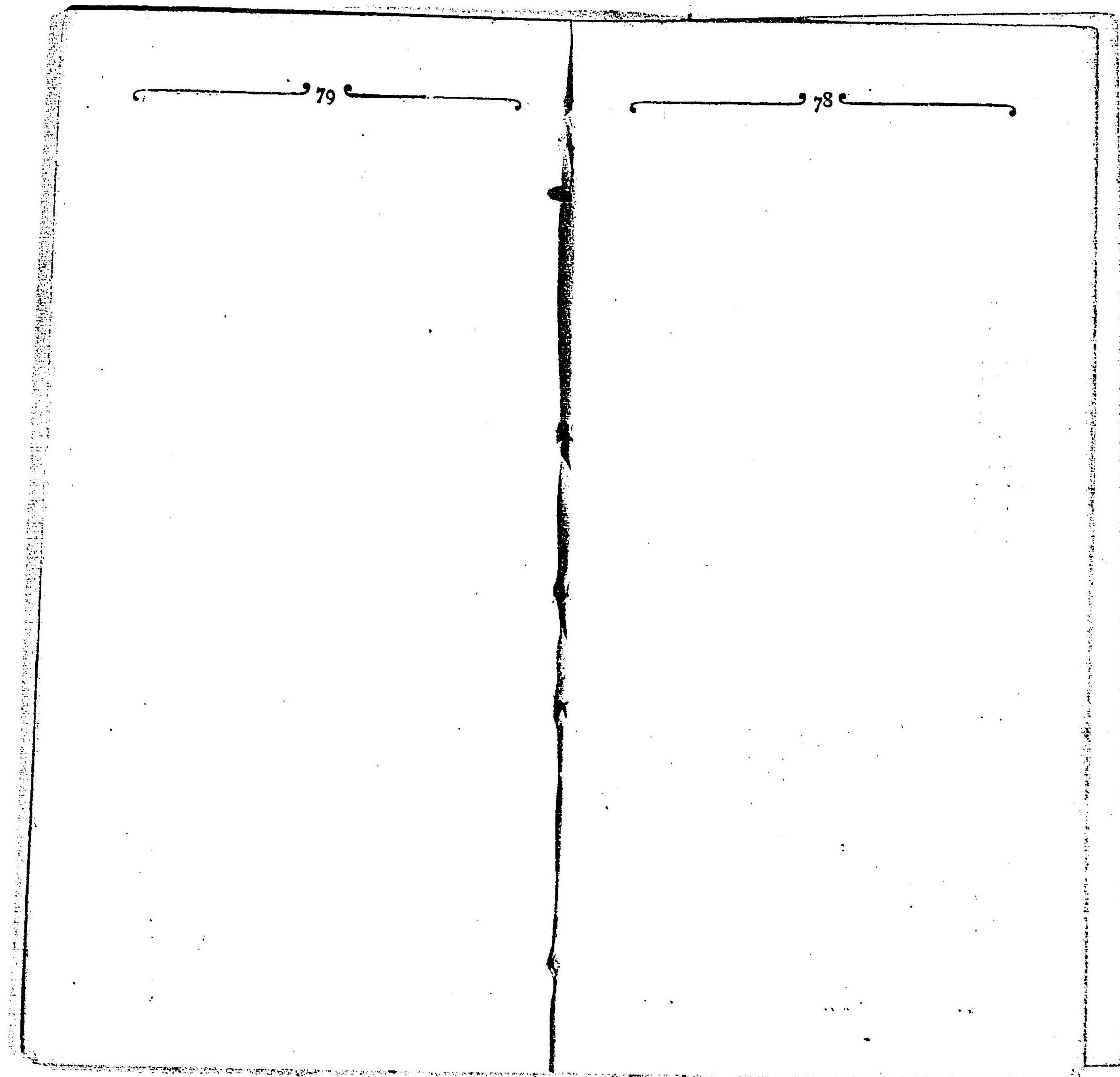
三、周航界 一五一九年ポルチガルの航海者マガリアエンスなる者イスパニア政府の命を受け太平洋より太平洋に出でフィリピン群島に達して土人に害されしも其部下はアフリカを迂廻して歸國し其目的を達しければ地球の球状なること事實とはなりぬ。

4. 発見の結果

一、歐洲文化の傳播、二、商工業の勃興、三、學術は新生面を開く(特に地理學博物學)、四、殖民事業の盛大、

スエリマ
ンアガ

スエリマ
ンアガ



79

78

明治三十七年十一月十五日印刷
 明治三十七年十一月二十日發行

【定價五十錢】

複製 者 作 著 不 許
 六 盟 館 編 輯 所

發行兼印刷者
 合 資 會 社 六 盟 館
 東京市日本橋區通二丁目一丁目番地
 代表者杉本七十九

大 販 賣 所
 東京市日本橋區南馬場二丁目 目黒 榎 目
 東京市日本橋區區廳前 目黒 榎 目
 東京市日本橋區石本二丁目 目黒 榎 目
 新潟縣長岡市 目黒 榎 目
 長野縣長野市 目黒 榎 目
 七 甚 黒 目
 吉 友 原 榎
 丸 百 七 本 杉
 郎 十 黒 目
 郎 太 喜 澤 四

發行所
 東京市日本橋區通二丁目一丁目番地
 合 資 會 社 六 盟 館
 電話本局二七四一

印刷所東京市日本橋區二丁目六合會

80
 文 藝 復 興

1. 原 復 興 因 の
 一、古典の研究 第十四紀よりの學者は傳説によらずして古典を研究し大に新思想の發揮に力めたり之を人道派又は人文學派といふ。
 二、東ローマの滅亡 ギリシア帝國の滅亡と共に學者の難を西方に避くる者多く西方諸國はまた之を受けて優待したり。
 三、活版術の發明 一四三六年ドイツ人グーテンベルヒが活版術の發明ありてより智識の交換容易となり學術振興するに至れり。

2. 學 者
 イタリアにては詩聖ダンテを始めベトラルカ、ボカチオ、フランチスにてはエスチエンヌ、ドイツにてはロイヒリン、エラスムス(地動説の本尊)等の大家輩出せり。

3. 美 術
 美術家にてはミケランゼロ(畫家にして彫刻家、建築家を兼ね)ドナテロ(彫刻家)レオナルド(畫家)等はいづれも斯道の名人たりき。

書叢解表學通普

六盟館編輯所編

世界史表解

東京

會社資

六

盟

館

後治
篇

27 12 7

丙寅

世界史表解 後篇

第三篇 近古史

六盟館編輯所 編

1. 原因

- 一、教會の富と權勢とを増したる結果僧尼の墮落腐敗したる事。
- 二、法王權伸長の餘政治に干渉したりし事。
- 三、人智發達したるため舊教の狹隘なる教義に満足せざりし事。

2. 先驅者

英人ウィクリフ(一三二四死) 獨人フス(一四一五死) イタリア人サボナローラ(一四九八死)等は改革運動の先驅者たりき。

2
一、宗教改革

3. 發端

免罪符販賣の事起るやサクソニア人ルーテル痛く其非理なるを論じ破門の宣告を受けしがルーテルは公衆の面前に於て其教令を焼き(一五二〇)しかばドイツの人心忽ち沸騰し改革の序幕愈々開かるスウィスのツウイングリが改革を唱へたるも殆ど同時なりき。

一、ウオルムス國
一五二一年カロロ五世帝ウオルムスの國會を開設してルーテルを召すルーテル陳辨風せずして國外放逐を命ぜらるルーテル乃ち身をサクソニア公に寄せ聖書の翻譯に従事せり。

二、シユカルマ
帝は佛(フランシス一世)土(オスマンリ二世)兩國の厭迫を憂ひ一五三〇年アウグスブルグの國會を開きて先づ新舊兩教徒の調和を試みしが成らざりき翌年新教徒は自衛のために同盟を組織

4. 改革の進行

三、新教の自由宣布
(一五三二年新教の一時自由宣布を許す(トルコ侵入のため)。

四、クルス
一五四四年獨佛和を結び連年の紛争に解けたり。

五、宗教和議
獨佛和平の後シユカルマカルデン戦役起りしが一五五五年アウグスブルグの宗教和議により皇帝は新教の宣布を許し新舊兩教徒の同權を認めたり。

一、新教諸國は法王より獨立し。二、宗教思想は深遠となり。三、人智は宗教の束縛を脱して自由發達の域に向ふ。

5. 結果

二、新教の弘布
と其反動

1. 新教の弘布

一、ルuter派の新教

アウグスブルグ宗教和議の後新教は速かに擴まりドイツの殆ど全部、デンマルク、スカンヂナウディア等に行はる。

二、カルビン派の新教

カルビン(一五〇九—一五六四)の唱へたる新教にして英のピューリタン宗、フランスのユグノー宗は皆此派に屬しスウイス、フランス、オランダ、イギリス等に弘通せり。

三、新教の弊害

イ、各宗派間の軋轢。
ロ、高遠なる理論に走せたる事。

一、舊教會の反省

新教の隆盛は舊教會の覺醒を促し僧侶は各自智徳を磨き宗教大會を開きて教義を修正し専ら民望の回復に力めき。

(イスパニアのロヨラの創立(一五三四)にかゝる

2. 其反動

一、トゼスイト團體

僧侶團體にて舊教保護を目的とせり此派の僧侶は嚴肅なる訓練を受け布教と兒童の教育とに熱心に従事したり。

二、イスパニア王の政策

イスパニア王フィリポ二世は富強なる國勢を利用し舊教を勵行してヨーロッパを統一せんと欲したり此政策は新教弘布の上に大障害を與へたりき。

1. 植民のト
ホルト

- 一、アルメ
ダメ
葡國が商業の中心をアレキサンドリアよりリスボンに移すことを得たるはアルメイダ、アルブケルケ兩人の力なりとすアルメイダは一五〇五年最初のインド總督に任ぜられアフリカの東岸及びインド西岸の要地を占領して商館を開きポルトガル人の商權を確立し。
- 二、ケルケ
ケブ
次代の總督アルブケルケはゴアに總督府を置き西はオルムズ島を略してベルシア灣口を制し東はマラカを征服して極東の通路を開けり。
- 三、ブラジ
ル發見
葡人はまた一五〇〇年ブラジルを發見せり伊人アメリゴベスプツテをして探検せしめたる後殖民地を設く。
- 四、極東交
通
一五一七年に支那と通商を開き一五四三年には日本との交通を開きぬ。

三、西葡兩國の
植民とイス
パニアの強

2. 植民のト
イスバ

3. 強
イスバ
大の

- 一、コルテ
ス
一五一九年コルテス若干の遠征軍を率ゐてメキシコに入り三年の後其王國を顛覆してイスパニア領となす。
- 二、ピサロ
ピサロがペルーに入りし頃はインカ王國存立し其首府クスコの宮殿廟宇は黄金を以て修飾し光彩陸離たりしが一五三二年ピサロ内亂に乗じて之を滅せり。
- 三、イリボ
一五五六—一五九八二世の世はイスパニアの極盛時代にして廣大なる版圖(イスパニア、ナポリ、シチリア、ミラノ、ネーデルランド、海外植民地)を領し英國女王マリアと婚して英國の舊教回復に助力し一五七一年には土軍をレバントに破り其後ポルトガルを合併し(一五八二—一五九八の間)其富強全ヨーロッパに冠たりき。

四、オランダの獨立

1. 原因

一、西王が古來此國の有せる凡ての特權を剝奪したる事。
 二、新教禁壓令を勵行したる事（人民蜂起して舊教寺院を破壊す）。

2. 獨立戰爭の發端

一五六七年西王はアルバ公を遣はし新教徒を討すると峻酷を極め又苛税を課せしかばオランダ諸侯ウィルヘルム終に獨立軍を起せり。

3. 經過

一、レーデンの圍
 一五七四年レーデン市西軍の圍を受け陥落且夕に迫る市民堤防決潰の最後の計に出で漸く敵を退くレーデン大學は實に此美談の紀念碑なりといふ。

二、ユート同盟
 一五七九年南部十州は西國に屈服したれども北部七州はユートレヒト同盟を起して抵抗を繼續す（後のオランダ國）。

4. 獨立

一六〇九年休戰條約成り一六四八年に至りて獨立を公認せらる。

三、ウィルヘルムの死
 一五八四年オランダ公刺客の手に死す國人その子モリスを戴き士氣反りて奮ふ。

四、英佛の應援
 英國女王エリサベタ、オランダに同情し一五八八年西の無敵艦隊を粉碎し翌年佛國も亦西國に對して戰を開く。

五、エギリスの宗教改革

1. イギリスの教會獨立

一、原因

ヘンリ八世王后カタリナ(カロロ五世帝の叔母)を離婚せんとて許可を法王に請ふ法王カロロ五世帝を憚り容易に許さざりければヘンリ自國の宗教裁判よりて王后を離別せり。

二、教會の獨立

法王因りてヘンリを破門しけるがヘンリは一五三四年議會の同意を得て寺院僧侶の首長となり舊教寺院の多數を廢止す次代エドワルド六世に及び教義を改正し教禮統一の條例を發布したり。

2. 新教の抑壓

一五五三年女王マリア位に登る女王は舊教の權力を再興して大に新教を抑壓しエギリス教會の基礎を危くし又四王フィリポ二世と婚して佛國と戦を交ゆ。

一、教會の獨立

一五五八年エリサベタ(一五五八一—一六〇三)舊教徒の妨害を排して即位し新教を復興して其基礎を確立せしむ。

3. 新教の勝利

三、マリア

スコットランドの女王マリアは事に依りて國を逐はれ身をエリサベタに寄せしが舊教徒が密かに廢立を謀り(西王フィリポ及び法王の援を得て)たるの故を以て死刑に處せらる。

三、英西の衝突

エリサベタは又オランダの獨立を助けて四國の無敵艦隊を紛碎せしかば殖民航海の業益盛大に赴き海上の權力頓に増大しぬ。

四、文運の興隆

教會の獨立、最大強國に對しての勝利は國民の志氣を振起せしめ文運の隆盛を致せりシェークスピア、スペンサー、ベーコンの徒此時代に出づ。

六、佛國宗教上の争亂

1. 原因

一、フランス一世同二世は甚しくユグノーを迫害し峻刑嚴罰を施しかば新教の憤怒極度に達しぬ。
 二、ギース侯カロロ九世の幼少なるに乗じ新教徒を虐待し所々に放逐蹀血相次ぎき。

2. 重要記事

一、争亂の開始
 新教徒はナバラのヘンリを首領に仰ぎて大に蜂起す爾後宗教上の軋轢は政權の争奪と混じて三十五年間の擾亂を醸せり。

二、バルトの變
 一五七二年カロロ九世の王妹ヘンリに嫁し華燭の典をバりに擧ぐ(バリの血婚)太后カタリナ之を機としてユグノーの隱殺を企てバルトロメオの大虐殺を行ひしかば内亂再燃しぬ。

三、ヘンリの争
 ヘンリ三世に至り痛く舊教徒の跋扈を慨し其首領ギース侯ヘンリを殺ししが王も亦刺殺せられ政權はナバラのヘンリに歸せり(一五八九)

3. ナント勅令

ヘンリ四世は深く時勢を觀破し自ら舊教に入りて民心を和け一五九八年ナントの勅令を發して。一、信教の自由を許し。二、新舊兩教徒の同權を承認せり。

1. 原因

宗教改革の反動はドイツにも現はれ新舊兩教徒の反目嫉視の餘各自同盟を作りて相對峙せりマチアス帝が從弟フェルディナンド(舊教熱心家)を擧げてボヘミア王となし新教同盟を抑壓するに及び争亂遂に破裂す時に一六一八年。

一、ボヘミア戦争
フェルディナンドの帝位を繼ぐやボヘミア人は新教同盟の首長アルツ侯フレデリキを王に戴きて帝に對抗せしがフレデリキ戦敗れてオランダに逃る(一六一八—一六二四)。

二、デンマーク戦争
デンマルク王クリスチアン四世新教徒の應援を名としてドイツに入りしが皇軍の將ワレンスタイン、チリ兩人の爲めに破られ以後ドイツの内事に干渉せざるを條件として和を結ぶ(一六二四—一六二九)。

七、三十年戦争

2. 戦記

三、スウェーデン戦争
スウェーデン王グスタフ・アドルフ大志あり佛國と約してドイツに入り連りに皇軍を破るワレンスタイン再び用ひられて將となり兩雄リッパエンに會戦し皇軍大敗グスタフ王亦陣没せり(一六三〇—一六三五)。

四、スウェーデン・フランス聯合戦争
スウェーデン軍は佛國の援助によりて戦争を繼續せしが數年の後佛相リシャリヤール死して戦争終結を告ぐ(一六三五—一六四八)。

五、ウエスタリア條約
イ、カトリック(ローマ舊教)、ルーテル、カルビニ三派の同權を認め。
ロ、スウェーデンはドイツのポメラニアの一部を得フランスは北境の領土を擴張し。
ハ、スウイスとオランダとは獨立を承認せらる(一六四八)。

3. 結果

一、ドイツは到る處田野荒蕪し市邑廢頽し人口殆ど三分の二を減じ帝國の統治は弛みて漠然たる聯合となり。

二、スウェーデン、フランスの兩國は國運益々隆盛に向ふ。

1. 隆盛の原因

一、土地卑濕不毛なるが故國民は早くも商工の業に就けり。永續せる人と水との戦争は堅忍不拔の性と進取の氣象とを國民に附與したり。

二、西國の政争に餘念なきと葡人の信用を東洋に失したるとは共に蘭人の興起に機會を與へたる者なり。

三、其極盛の當時は世界の商船の五分一を占有し歐洲沿岸に於ける漁業を獨占しリスボンの繁榮はアムステルダムに移り其富盛一時人目を眩惑せしめき。

ハ、オランダの隆運

2. 隆盛の状況

3. 通商と殖民

一六〇二年印度商社の創設の後一六一九年ジャワを占略してバタビア府を創め東方經畧の策源地となしそれよりモルッカ群島マラカ(一四六〇)を略し喜望峯殖民地を開き(一六五〇)セイロン(二六五八)を奪ひ又支那及び日本(一六〇〇)初めて交通を開き一六三九以後は蘭船に限りて通商を許さる)と通商し臺灣は一時其占領に歸せり(一六二四)。

1. 命第一革

二、革命の進行

イ、革命

一六四二年王兵を率ゐて長期議會(一六四〇—一六五三)臨み硬派議員の領袖を捕へんとせしかば人民非常に激昂し議會軍を編成して王軍に當り王を擒にして之を死刑に處せり(一六四九)

長期議會は是に於て貴族院を廢し政

一、原因

ジェームズ一世以來君主神權説に執着して議會の權利人民の自由を無視して暴政を施しけるが(不當なる課税、不法なる裁判、ビネーリタン派の暴壓、國會を永年開會せざる等)スコットランドの叛乱に及びカロロ一世議會(短期及び長期)と大衝突をなし内亂遂に破裂す。

九、英國の革命

三、共和時代

ロ、共和政府

權を議政會に委ねしが實權は議會軍の將クロンウエルの掌中にありき。

クロンウエルはスコットランド、アイルランドの叛亂を鎮め又オランダを討ちて其海上權に大打撃を與へ一六五三年プロテクトルに擧げられしが政治は専ら武斷主義を實行し奢侈遊逸の風を矯正するに力めき其子リチャード其職を襲ぎ數月にして之を辭せり。

クロウ

一、復古政

一六六〇年王政復古しカロロ二世立てり王も亦王權擴張に汲々し蓄教に偏するの傾向ありしかば議會は王に迫りて審査條例人身保護條例を發布せしめぬ。

2. 第二革命

二、革命の原因

ジェームス二世が王權の無限を主張し、舊教の再興を企てて審査條例を廢止したるに由る。

三、革命

一六八八年オランダ公ウィルヘルム三世(王后はジェームスの長女)夫妻國民に招かれて英國に入りジェームスは佛國に出奔せり。

四、ウィルヘルム三世

前代の弊政を釐革して權利條例を發布し、人才を登用して政黨内閣の端を啓き、又佛王ルイ十四世のジェームス復位運動を阻止し、己の英王たることを承認せしむ。

(補)

ホイグ黨(進歩主義) トーリー黨(保守主義) の兩政黨はカロロ二世の代に出現す。

一〇、佛國の富強

1. 賢相の出

一、リッシー (ルイス十三世の宰相) 明決果斷よく宗教上の紛争を絶ち貴族を抑へ卅年戦争にはグスタフ王を援けて其目的を達す。

二、マザレ (ルイス十四世(一六四三—一七一五)に相として卅年戦争を繼續し終にウエストファリア條約の好果を收めき。

2. 十ルイ四世

王は國父主義を固持しマザレンの死後は純然たる専制政治を行ひ經濟家コルベールを登用して財政を整理し商工を保護し航海の發達を計り又君主の威嚴を添へんと欲し大に土木を興して宮殿園囿を營み榮府を以て封地の制に換へ儀禮を盛にして其華美に酔はしめき。

一、ネーデルランドを主張してネーデルランドを占領す一六六八年アーヘン條約により國境の十二市を得。

3. 十ルイ四世の海外略

一、オランダ侵入 一六七二年オランダの勢を挫かんとて出兵すオランダ公ウイレルム三世巧に西王獨帝ブランデンブルグ侯等と聯合して之に當る一六七八年ナイメーヘンの和約成り佛國は僅に其數市を得。

二、ツァル侵入 一六八八年ツァル伯の繼嗣絶えたるに乗じて侵入せしが再びオランダ公(此年英王)の妨害を受く一六九七年ライスウィイクの和議を結び佛國はスツラスブルグを得たり。

1. 原因

一七〇〇年イスマニア王カロロ二世死して子なし遺言して佛王ルイス十四世の孫フリボを繼嗣と定む歐洲各國其權力の平衡を失はんことを恐れ獨帝レオポルド一世英王ウイレルム三世首唱となりオランダ、ブランデンブルグと連合しレオポルドの第二子カロロを立てんと謀る。

2. 記事

事

一、戦争の開始
一七〇一年戦争は各方面に開かれ英のマールボロ、サボヤのエウジエニオの兩人驍名を轟かせり。

二、形勢の變
一七一一〇年英國の輿論平和に傾きマールボロ召還せられ翌年獨帝ヨセフ一世死して弟カロロ帝位に即きしかば局面茲に一變し一七一三年ユートレヒトに於て和を結ぶ。

一、イスマニアの繼承戦争

3. 結果

果

一、ユトレヒト和約

- イ、西佛兩國は永久合同せざるを條件としてフィリポ五世の王位を承認し、英國はジブラルタル及びミノルカ島(以上西國より)北米ハドソン灣沿岸、ニューファウンドランド、ノバスコチア(以上佛國より)を得。
- ロ、獨帝はネーデルランド、ミラノ、ナポリ、サルヂニアを得(佛獨の和約のみは翌年の締結なり)。
- ハ、ブランデンブルグはプロシヤ王號を許され。
- ニ、
- ホ、サボヤはシチリア島を得たり。

(佛國は國力疲弊して他日の禍根を貽し英國は一

三、
戦後の
列國の

七〇六年全くスコットランドを合併し大ブリテンと稱して國勢益々加はり西國は是より遂に振はすサボヤは一七一七年シチリアとサルヂニアとを交換して王號を稱し(後のイタリア王國)ブレンドンブルグは漸次國運發達の機運に向へり。

一、二、北歐及び
東歐の形勢

1. デスウェーデン

デンマルク、スウェーデン、ノルウェーの三國は元相合して一王の統御を受けしが一五二三年スウェーデン先づ分離しグスタフワサ王位に即きて國威を張れり卅年戦争以後は北歐の最強國となりカロロ十世同十一世の英主を経て益々國勢増進し以て同十二世に至りぬ(一六九七即位)。

2. デンクマ

デンマルクはクリスチアン五世の後フレデリキ三世立ちて獨裁の權利を握り一六九九年フレデリキ四世其後を繼ぐ。

3. ポーランド

其初めドイツの屬國なりしが一三〇六年分離し一三八六年にはリトワニアと合併して其領土バルト海より黒海に及べり一五七二年王統絶えて選舉王國となりたる後は國會常に紛擾し四隣の蠶食を蒙れり一六九六年サクソニア公オースト獨帝の援助によりて其王位を兼ねたり。

(元ドイツの一小藩なり(ポーヘンツォルレルン)一四一五年ブ

4. アプロシ

ランデンブルグ選公の地位を得一六一八年にはポーランドよりプロシアを得フレデリキ・ウィルムの子フレデリキ一世(一六八八—一七三三)に至りイスパニア繼承戦争に功あり始めてプロシア王の稱號を取れり。

5. ロシア

ロシアにては一五九八年イバンの血統断絶しければ諸侯議して皇族ミハイル・イヨドロウイチ・ロマノフを迎立す(現王統の祖)其後二代を経て一六八二年ペテロ帝に至る(一六八九より親政)。

1. ペテロ世

ペテロ風に大志を懷き外人の招聘外國の歴訪等により詳に先進國の強大なる所以を究め孜々營々内政の大改革を實行し又ギリシア、カトリックの主長を兼ねしかば政教の主權一身に集まり大飛躍の準備全く成りぬ。

一、原因

ペテロはバルト海沿岸に海口を得んと欲しデンマルク、ポーランドと同盟して各方面より其領土に侵入す(一七〇〇)

カロロ十二世年少而かも非凡の將才あり迅雷の勢を以てデンマルクに入り僅々二週日にして和を乞はしむ。

カロロは轉じてロシアに入りナルバを攻陥し進んでポーランドを略しオースト王を廢してスタニスラ・レスチンス

デンマルク方面

一三、ロシアの勃興

2. 北方大戦

ニ、戦記

キを立つ(一七〇四)ペテロは此間にフィンランド灣沿岸を略して都城を新設す一七〇九年カロロホルタバに大敗してトルコに投ず是に於てオースト復位し、デンマルク再びスウェーデン領を侵す。

一七一四年カロロ歸國しノルウェーを征して戦死す。

ロシアポーランド方面

三、結果

一、一七二〇年バルト海南岸の地をプロシアとハンノフェルとに割譲し。

ロ、一七二二年バルト海岸東岸の地をロシアに割譲す(ニスタット條約)。

3. ポーランド継承戦争

一、原因

一七三三年ポーランド王オグスト死し其子オグスト三世スタニスラ・レスチンスキと王位を争ふ。

二、記事

フランス、イスペインは縁類の故を以てスタニスラを援けドイツ皇帝と露帝アンナとはオグストを助け交戦數年に及べり。

イ、スタニスラは王位を棄てロートリンゲン公となり。

ロ、オーストリアはバルマ、ピアチェンツァを得。

ハ、イスペインアのドン、カロロはシチリア、ナポリを得てナポリ王と稱す(一七三八ウイーン條約)。

三、結果

一四、プロシアの勃興

1. フレデリク二世大王

王生れて柔弱文事を弄し吹笛に其妙を得たり父王が勤儉尙武を國是として得たる大なる遺産(富庫精兵)を襲ぐに及び始めて豪傑の天資を發揮し終に大王の名を博しぬ(一七四〇—七八六)

一、原因

一七四〇年獨帝カロロ六世死して男系絶ゆ女マリア・テレサはブラグマチツシエ・サンクチオン法に則りオーストリアの遺領を相續せしが皇帝カロロ七世及びサクソニア公兼ポーランド王オーグストは其繼承權を主張し西王フィリポ五世、プロシア王フレデリク等亦各其一部を要求せり。フレデリクはシレシアを占領し同盟諸國(佛、四、バワリア、サクソニア)も出兵せしがテレサは全力を他敵に注がんと欲しシレシアをプロシアに

二、戦争の第一期

(興へて同盟を脱せしむ。)

(補)イギリスはオーストリアを助く。

フレデリクは其後オーストリア軍の勢盛なるを見再び同盟に入りしがカロロ七世崩じて形勢一變し次ぎてテレサの夫フランシス(現王統の祖)帝位に上り形勢一變し一七四八年アーヘンに和を結ぶ。

三、戦争の第二期

四、アーヘン和約

列國各其侵地を返還す但プロシアはシレシアを得オーストリアはバルマ、ピアチェンツァを西國の王子フィリポに與ふ。ハンノフェル家のイギリスに君臨すること及びブラグマチツシエ・サンクチオンは承認せらる。

2. オーストリア継承戦争

一五、七年戦争

1. 原因

一、マリアテレサがシレシアを回復せんとしたる事。

二、列國(露、佛、西、サクソニア)プロシアの勢盛なるを見テレサに味方してプロシア分割を約したる事。

一七五六年フレデリキ大王急に起ちてサクソニアを占領し連りに列國軍を破る。
普王機先を制す

一七六一年同盟國なる英國が軍資の供給を絶ちしよ
普國の困迫

一七六二年露帝ペテロ即位して普國を助け翌年英佛和成り佛兵ドイツを撤退せしにより形勢忽ち一變す
形勢一變の事

一七六三年フベルツブルグに和を結ぶ。
イ、プロシアはシレシアを保持し。

ロ、テレサの子ヨゼフ二世を皇帝に選舉すベ
フベルツブルグ和約

2. 戦記

3. 結果

三、プロシアは此役に於て寸土を得ざりしかと大に國威を發揚して他日覇權を握るの地盤を作り大王の統治は列國の模範となれり。

1. 新に於世界
領る英土佛

2. 印度に於
領ける英土佛

一、英領
ニュー・イングランド諸州(マサチューセッツ、ニュー・ハンプシャー、ロード・アイランド)、メリーランド、ヴァージニア(ヴァージニア、南北カロライナ)(以上英人創建)ジママイカ(西國より)新ネーデルランド、ニュー・ヨーク、ペンシルヴァニア、コンネクチカット(新スウェーデン)デラウェア、ニュー・ジェルシー(以上蘭國瑞典より奪取)ニュー・ファンドランド、ノバスコチア、ハドソン灣沿岸
〔以上ユートレヒト和約〕。

二、佛領
カナダ、ルイジアナ(ルイ十四世の時)西印度の小アンチル諸島。

一、英領
マドラス、ボンベール、カルカッタを根據地とす。
三、佛領
チアンデルナゴル、ボンヂシエリーを得て根據地となす。

一六、殖民地に於ける英佛の衝突

3. 衝突

4. 結果

勝利の原由
オーストリア繼承問題及び七年戦争の起るや佛國が大陸戦争に重きを置けるに反し英國は殖民地侵略に重きを置きオーストリア及びプロシアに對しては單に軍費を供給したるのみなりき。

二、戦記
新世界に於ては一七五九年英軍ケベックを拔きて(英將ウォルフ戦死)カナダ地方を占領し印度に於ては佛國總督ダブレイ連りに勝を制したるも其召還せらるゝに及び英人クライブ偉功を奏し一七五七年ベンガルを保護國となせり。

一、
英はカナダ、ケーブレトン島、グランド島、セネガル(アフリカ)(以上佛國より)フロリダ(西國より)を得佛はルイジアナを西國に割けり(一七六三バリーの和議)。
三、海上權英國に歸し航海通商の利頓に増大す。

(附)

英人クック一七五六年以來三回の航海によりてアウ
ストラリア、ニュージーランド、南氷洋、北米の西岸等
を探検し幾多の島嶼を發見せしが英國は一七八八年
始めてオーストラリアの拓殖に従事せり。

露國の侵
略とポー
ランドの
滅亡

1. ポー
ランドの
滅亡

一、第一
次分割

一七六四年ポーランド王オースト三世死す露帝カタリナ二世已が寵臣を擧げて其王となし事毎に干渉を試む國人トルコの援を得て之に抗せしが普墺兩國は獨り露國の強大に赴くを懼れ竟に三國の間に第一次分割を行ふ(一七七二)次ぎて露土間の和成り土國は黒海北岸の一部を露に與ふ。

二、第二
次

露土の平和再び破れたるを機としコッシューシコ等義兵を擧げしが露軍の破る所となり普墺の間に第二次分割遂行せらる(一七九三)。

三、第三
次
即滅亡

一七九四年コッシューシコ等再び義兵を擧ぐ露墺普三國兵を出して第三次分割を行ひポーランドに亡ぶ(一七九五)。

一八、北米合衆
國の獨立

2. 重要記事

1. 原因

2. 露國の
アシベリ
侵略

露國のシベリア侵畧(コサク族を用ふ)はイバン四世の時に始まり其後の諸帝概れ其の遺志を繼ぎ一六三二年の頃にはカムチャツカに達しキベテロ大帝の世には清國と境界を議定し(一六八九)爾後探檢の業益進みアレウト諸島よりアラスカに及びぬ我が日本との接觸は一六九七年我國人のカムチャツカに漂着せるを以て始めとす。

英國が國庫窮乏の爲め殖民地に課税せんとするや殖民地は國會の越權を咎め之に反抗せり折しも一七七三年ボストン事件起り本國は兵力を以て之を威壓せしかば殖民地十三州は大に激昂して一七七五年ワシントン指揮の下に獨立軍を起し次ぎて獨立を宣言せり(一七七六、七月四日)。

フランス、イスパニアは舊怨を夾みて獨立軍を助け(佛のラフアイエット等の志士多く獨立軍に投ず)ロシアは海國武裝中立

3. 結

果……

〔同盟を起して陰に援助を與へしに因り獨立軍大に振ひ一七八一年英軍の主力を粉碎す一七八三年ベルサイユに於て講和。一、合衆國の獨立承認。二、英國はセネガルを佛國に讓與し。三、英國はフロリダ及びミノルカを西國に讓與す。〕

〔補〕……合衆國の憲法を制定せるは一七八七年の事にしてワシントンを第一回の大統領に擧ぐ。

一、九、十八世紀に於ける社會状態と思潮

1. 社會の狀態

一、社會の風潮

歐洲一般に佛國に則り國父主義を採用し儀容の修飾と華美を競ふの風とは上下を通じて流行せり。

王公、貴族、僧侶、人民の階級は依然として存し貴族(特權多し)僧侶は富強を極め人民は第三級民と稱せられ王公貴族僧侶より收入の多分を收歛され貧困を極めたり。

二、社會の組織

十八世紀は舊弊の一掃と中央集權實行の時代にして其思潮革新文學として現はる革新文學は其初め急激に舊弊を一掃するを以て其主義となし王權の擴張を賛したるが中央集權の實舉り特權社會全く抑壓せらるゝや其銳鋒は急轉して君權に直下し來り自由平等の説大に起る初期にはウ

三、革新文學

オルテール最も著はれて革新文學の王と稱せられ後期にはモンテスキエ(萬法精理の著者)ルソー(社會契約論不平等原因論の著者)最も崇敬せらる。

自由平等の説と共に純理の研究盛大を極め佛國は理學の黄金時代を現しキッピエー、ラボアジエー、ラプラス、の輩最も其名を專にし此風潮延びて一般社會に及び理學は日常の話柄となるに至りぬ。

2. 思潮

二、理學

二〇、佛國革命の初期

1. 原因

- 一、戦争と豪華との爲め財政困難を極む。
- 二、政府は冗官多くして統一を欠けり。
- 三、貧富の懸隔甚しきに係はらず上級は税賦軽く下級は却りて重税を負担せり。
- 四、革新文學の煽動。
- 五、米國獨立の影響。

2. 發端

ルイス十六世(一七七四—一七九二)チルゴー、ホッケル等を援擢して財政整理に當らしめしが他の妨害に遇ふて目的を達する能はず依りて一七八九年五月三民會を召集す然るに三民間に議論の衝突起り平民は貴族僧侶と分離して別に國民會を組織せしかば政府は武力を以て之を威嚇し暴民は蜂起してパステューの獄を破壊す同時に地方にも暴動起り貴族國外に遁す。

3. 重要記事

- 一、國王の拘禁
 - 一七八九年十月國王王后亂民に擁せられてパリに入りしが翌年六月出奔を企て發覺して監禁せらる。
 - 一七九一年四月風潮の極端に赴くを慨せしミラボー死す十月新憲法成り國民會解散して立法議會之に代りしが議員は三黨に分れ其中の過激共和主義なるジヤコベン黨(首領ロベスピエール)大に勢力を逞うせり此間に普壇同盟成る。
 - 一七九二年同盟軍境上を歴す八月暴民王宮を襲ひ王黨を虐殺し九月革命軍同盟軍を撃破し立法議會を解散して國民議會を以て之に代へ共和政を宣言す十二月王を糾弾して死刑を宣告し翌年一月善良なるルイス十六世斷頭臺上の露となる
- 二、ジヤコベン黨
- 三、共和政

三、佛國革命の恐怖時代

1. 公安委員會

ルイス十六世處刑の事傳はるや英境普西葡等の列國大聯合を作り大軍を起して佛の四境を犯し國內王黨の一揆亦起るジヤコベン黨は過激手段に訴へ先づジロンド黨(緩和共和主義)を一擧に仆して國論を一定し公安委員會を設けて國事を決し遂に英佛の聯合軍を退け西葡の兵を驅逐し國內の反抗をも鎮定し得たり。

2. 革命の過劇

過激黨は反對黨鎮壓の爲め更に革命裁判所を開き死に處せらるる者日に七八十人を下らす王后王妹も亦命を預せりジロンド黨の亂には銃殺溺殺等の刑を設けて虐殺を行ひ又曆數、宗教より衣食、風俗、氏名等に至る迄悉く其舊慣を廢したるが如き恐怖時代の名眞に空しからず。

3. 反動

既にしてジヤコベン黨内に閥きダントン先づ斷頭場に送られしがロベスピエールの理想社會建設も空想たる事明となり一

七九四年七月彼も亦死に處せられ恐怖時代終を告ぐ。

1. 府總裁政

一七九五年ジオコベン黨の餘衆亂を作して國會に抗す砲兵の一佐官ナポレオン・ボナパルト國會の命を受けて之を鎮定す此年國民議會新憲法を制定し上下兩院と五人の總裁とより成れる政府成立す新政府は侵略主義を採用しモロー、ジッルダンの二將をしてドイツにボナパルトをしてイタリアに侵入せしむ。

2. 略外國侵

一、イタリ

一七九六年ボナパルト上伊に入る連戦連勝尙ほ進んで埃國に入りしが一七九七年兩國の間にカムボ・フォルミオの和約成り埃領ネーデルランドは佛國に歸しチサルピナ共和國は承認せられジエネバはリグリア共和國となる。

二、革命主

一七九五年蘭國は佛國の侵略を受けてバタビア共和國となり一七九八年法王擒にせられてロー

三三、佛國革命の末期

3. 府統領政

播

マ共和國起リスウイスは佛國の干渉によりてヘルウエチア共和國となる。

三、トエジプト遠征

一七九八年ボナパルト、エジプトを征し(英國に打撃を加へんが爲め)直に之を平定し得しも其海軍は英將ネルソンの爲めに撃破せらる翌年進みてシリアに入りしが目的を達すること能はずしてエジプトに退却せり。

一七九九年歐洲列國は英國の首唱に依りて大同盟を組織し頻に佛軍を破る時に總裁政府の威信また地に墜ちければボナパルト之を聞きて急に歸國し武力を以て政府を介し國會を解散し新憲法を布き統領政府を組織して其實權を握れり。

一八〇〇年ナポレオン再び伊國に侵入しモローはドイツに入り各方面共に大捷を

4. 歐洲の時和
一平

- 一、リッパネの媾和
 - 一博せり一八〇一年リッパネに於て媾和。
 - ロ、ライン左岸を悉く佛國に讓與し。
 - ハ、ナポレオンの建設せる諸共和國を承認す。
- 二、アミアンの和
 - 英國も今や財政困難の境に陥り且國民の平和を希望する者多かりしかば一八〇二年トリニダード島、セイロン島を除くの外悉く其侵地を返して和を結べり。

1. ナポレオン皇帝即位の文動

ナポレオンは数月の平和に乘じ人材を擧用し教育行政を刷新し徴税法を改良し法典を編纂し舊教を回復し道路溝渠を改修する等革命の破壊せる諸制度の恢復に努力せしかば國民非常に歡喜し一八〇二年擧げられて終身の首班統領となり一八〇四年遂に帝位に登る(イタリア王を兼ね)。

2. 對佛同盟と對英戦争

一、對佛同盟 一八〇三年英佛新に隙を生じ對佛同盟(英、露、墺、スウェーデン)復起る佛國は西國と聯合して之に當れり。
二、アラブの海戦 一八〇五年英の提督ネルソン西佛聯合艦隊をトラファルガル附近に粉砕す是より制海權全く英國の握る所となる。
三、アウスツの戦 同年ナポレオン墺露聯合軍をアウスツテルリツツに撃破し三帝會合の結果ベネチア地方を得たり

二三、ナポレオンの全盛

3. 神聖ローマ帝國の滅亡

一八〇六年ライン同盟成立しナポレオン其保護者となる是に於てドイツの統一破壊せられ神聖ローマ帝國は亡び獨帝フランシス二世は墺帝フランシス一世と稱しぬ。

開戦の事情

プロシアは久しく傍觀の地位にありしがナポレオンの驕傲を忍び得ず一八〇六年ロシアと同盟して佛國と開戦す。

4. 普露兩國の戦争

チルシツの條約

ロシアはワルシニア公國、ヨセフのナポリ王たる事、ルイスのオランダ王たる事、ジェームのウエストファリア王たる事、ライン同盟を承認し大陸條例に加盟す。
プロシアは莫大の償金を課せられ莫大の領土を割き兵備を制限され大陸條例に加盟せり。
(以上一八〇七)

露佛條約

普佛條約

5. ナポレオンの全盛

三、大陸條例

大陸英國間の交通を絶對的に禁止する條例なり
ナポレオンが經濟上より英國を迫害せんとの意
に出でたる者(一八〇六)。

葡國は大陸條例を拒みしがために占領せられ西王フェルヂナ
ンド七世は迫られて王位をナポリ王ヨセフに譲り(一八〇八)
ミュラー(佛帝の妹婿)はナポリ王に封ぜられ墺國は反抗して
イルリリア地方を割かれ且大陸條例に加盟し皇女マリア・ル
イサを佛帝に嫁せしめ蘭國は佛帝の直轄に歸しナポレオンの
威名歐洲を震撼せり。

1. 失勢の原

大陸條例發布の結果諸國の商工業急に衰頹し佛帝怒の府となる。
併呑せる地方に對し歴史習慣を無視して新政を布きし爲め愛國の至情を激發せり。

一、原因
大陸條例を履行せざるにあり(實は屈服せしめんため)。

2. 露國の征伐

一八一二年佛帝親ら五十万の大軍を以て露國に入り九月モスクバを陥れしが全市焼失(府民の計して久しく止まる能はず遂に退軍す時に天漸く寒く佛軍飢寒に苦み生還者僅に十萬なりき)。
三、結果: 英露普墺の四國同盟成り佛帝の運傾き始む。

3. エルバ

一八一三年同盟軍ライプチヒに大捷を得翌年三月長驅してパリに入りナポレオンの帝位を廢してエルバ島に流し此地に

二四、ナポレオンの末路

皇帝

帝號を稱するを許す四月ルイス十六世の弟同十八世王位に登り王政復古す。

4. 百日政府

善後策を講ぜんためウィーン會議開かれしが列國反目の奇觀あるを聞き一八一五年三月一日ナポレオン密にエルバを脱して佛國に上陸す將士狂奔して彼を迎へ王室は英國に出奔しぬ六月十八日同盟軍大にワーテルローに勝ちて再びパリに入りナポレオンをセント・ヘレナ島に流しぬ。

5. ウィーン會議の列國

一八一四年九月開會一八一五年六月閉會を告げ歐洲の平和漸く恢復す、其結果は、一、英國は佛蘭西國の殖民地の一部とマルタ島とを得、二、普國はサクソニアの半部ボンメルン、ウエストファリア、ライン諸洲を得、三、墺國はベネチア、イルリリア、を回復し、四、露國はワルシヤ公國をポーランド王國として其王位を兼ね、五、スウェーデンはノルウェ

一を得、六、蘭國は埃領ネーデルランドを得て王國となり、
七、スイスは永久中立の聯邦となり、八、イスパニア、サ
ルヂニア、モデナ、ナポリ、法領等を舊主に還し、九、ドイ
ツ聯邦組織せらる。

一、革命主義の動

1. 神聖同盟

露帝アレキサンドル一世の首唱にかゝりウィーン列國會議の年に成る博愛主義を標榜すれども其内實は民権自由の抑制にありき。

2. ドイツ學生の騷動

一八一七年以來ドイツに學生の自由主義運動起りぬ一八一九年奥相メッテルニヒ聯邦と謀り學生の結社を解散し言論の自由を束縛す。

3. 西國の一揆

一八二〇年西國に一揆起り憲法再興されしが神聖同盟は之に兵力干渉を行ひ舊態に復せしむ。

4. カルボナリの騷動

同時にイタリア北部に秘密結社カルボナリの騷動起りしが奥國兵を出して之を鎮定せり。
〔英國にも反動起りトリー黨勢力を逞うし殺物條例を通過し

5. 英國に於ける反動

で輸入の穀物に重税を課せり一八一六年不作のため人心動搖せしかば政府は集會出版の自由をさへ制限せしが一八二〇年以後自由主義勢力を回復しき。

1. 原因

一、トルコの武威大に衰へ且政權親衛兵の手に歸して國政舉らざりし事。二、異教徒異人種の支配がギリシア人に大なる刺撃を與へ國民的感情を昂起せしめたる事。

一八二一年イブシラン子の指揮の下に兵を擧げしが土國はエジプト太守メヘメット・アリに命じ其子イブラヒムをしてモレアを抄略せしめ殺虐を極め是に於て歐洲の輿論大に動かされ一八二七年英、露、佛三國の間にギリシア保護同盟成立し英佛聯合艦隊は土國の海軍をナバリノに全滅し露軍はドナウ河を渡りて土國に侵入せり。

二、ギリシアの獨立

2. 外國の干渉

3. 結

果

既にして英國は同盟を退き露國單獨行動をなすの好機を得しが一八二九年土國屈して和を結べり。

一、土國はギリシアの獨立を承認し。二、土國は列國に對して海峽を開放し。三、露國はドナウ諸國の保護權を得たり。

三、アメリカに於ける各殖民地の獨立

1. 佛國地殖
ハイチ共和国

黒人蜂起して一時ナポレオンに鎮壓せられしが後再び争亂起り黒人遂に自由を得てハイチ共和国を建設せり。葡王ジョアン六世の佛帝の難をブラジルに避くるやブラジルは大に繁榮に向ひしが一八三〇年王歸國し本國は従前の政策を施さんとせしかば人民太子ペテロを擁して獨立帝國を建てき。

2. 葡國地殖
ブラジル帝國

- 一、チレ：一八一七年サン・マルチンの盡力によりて獨立す
- 二、ブエノス・アイレス、パラグアイ、ウルグアイ、ベネスエラ、ノバ・グアラ、エクス・アドル
- 三、ヨセフが西王たりし時に離れフェルディナンド七世復位の後も依然本國に服従せざりき（一八一六—一八二五の間に獨立）
- 四、一八一九年三國合してコロンビア共和國起りしが（ボリバルの盡力）一八三〇年各分立す（ノバ・グラナダは今のコロンビア）。

3. 西國地殖

- 四、ペリビア、ボリビア、一八二一年獨立し（ボリバルの盡力）其一部は後に分離してボリビア共和國となる。
- 五、メキシコ、一八二一年イツルビデの力によりて獨立す

(補一) 佛領ルイジアナは一八〇三年北米合衆國に賣却せらる。

一八二三年一二月合衆國大統領モンローの宣言せる所謂モンロー・ドクトリンなるもの、要旨左の如し。

(補二) 一、米大陸中自主自由の條件下に占有せらるゝ土地（換言すれば現存する歐洲の諸國及び殖民以外の土地）には將來歐洲諸國の殖民を許さず。

1. 七月革命

ロ、歐洲諸國が新立の諸國に對して干渉をなすは是れ即ち合衆國に和親ならざるのみならず合衆國の平和と幸福とに危害を加ふる者なり。

ハ、合衆國が歐洲諸國の内政に干渉せざる如く歐洲諸國も亦米大陸諸國の内部問題に干渉することなかるべし。

一、原因
 佛王カロロ十世は頑固なる保守家にて宰相も其人を得ざりしに基づくると雖其暴動の導火藥たりしは一八三〇年七月の勅令(米だ開會せざる國會を解散し選舉法を政府の私意もて變改し出版の自由を禁止す)之れなり。

二、終局
 同月暴動急に起り街戰三日の後王は出奔しオルレアン公ルイ・フィリップ人民に迎へられ新憲法に宣誓して王位に即く(市民王)。

一、ネーデルラントの分裂
 此年八月南北國情の異同よりブルッセルの市民蜂起して假政府を建つ翌年歐洲の列強ロンドンに會して其調停を計りベルギーの獨立(永世中立)を承認せり。

二、ドイツの動搖
 ドイツの諸邦にも革命運動輸入されしが結局憲法の發布又は其改正によりて鎮靜に歸せり。

三、ポーランドの叛亂
 同年十一月にはワルシヤに暴動起り、新政府は例によりて假設せられぬ然るに貴族派平民派と相軋りて露軍の進撃を防ぐ能はず翌々年八萬の志士シベリアに流され憲法は中止せられき。

2. 革命の 影響

四、イタリ アの一 揆

一八三一年カルボナリ(秘密結社)の一揆起りしが
換軍の援助によりて直に鎮壓せられ志士多く
英米に遁る。

五、西葡二 國の内 亂

葡國にてはペテロの弟ミカエル守舊黨を帥めて
位を僭し西國にては王弟カロロ(專制黨)の亂あ
りしが一八三四年共に立憲黨の勝利に歸せり。

六、英國の 改革

英國にては其後着々弊政の改革を實行しぬ一八
二九年には舊教法案を發布して舊教徒の束縛を
釋き又七月革命の影響は更に切要なる結果を生
み一八三二年選舉區改正法案議會を通過し腐敗
選舉區廢止せられて新興の大市之に代り選舉資
格者は前日に倍するに至り君民同治の制益發露
せり。

(補)

一八一五年以降普國が全力を注ぎし關稅同盟の
企圖は着々其歩を進め一八三四年には加盟區域
中獨南獨に及び其勢力隱然ドイツの覇者を以て
目せらるゝに至りぬ。

五、東方問題

1. 東方問題の由来

土國の領土は三大洲に跨り極めて形勝の地を占むれども昔日の武威次第に衰へ政弊年と共に甚しく内耶回兩教徒の軋轢と離叛運動とは外列國の利害と相關聯して數々紛争を來し、かば西歐列國も爾來多大の注意を東方に拂ふに至りぬ。

2. エジプト事件

一、第一次

略す露帝ニコラス一世が土帝の請を納れて大兵を派するに及び列國之に干渉しシリアと小アジアの一部とをエジプトに與へて事落着せり。

二、第二次

其後エジプト佛國の援を待み再び兵を擧げ連りに土軍を破る是に於て英國は露軍與と提携して土國を助けエジプト軍を破りしかば、メヘメット遂に屈してシリア、小アジアを奪はる(一八三九—一八四〇)。

(補)

英國は佛國の政策に反對して一八三八年アデンを略取す。

一、ロシア

ロシアは漸次キルギス地方カウカス地方を蠶食し遂にアフガニスタンに於て英國と其勢力を競ふに至りしが一八三九年ヒバを伐ち大雪のため

二、英國

極力露國のアフガニスタンに於ける勢力排除に力め一八四九年には全くパンジブ地方を服従せしめき。

3.

アフガニスタンに於ける露英の關係

1. 二月革命

一、原因

イ、ルイフィリップ王の人望大に傾きし事。ロ、東方に於ける外交の失敗。ハ、ナポレオンの遺骸を迎へたる事。ニ、ギゾー内閣の政略（中等社會の利益のみを保護し、制限選挙法を施行す）に對する不平。

二、革命

一八四八年二月選挙法改正論者の大示威運動を試みるや官民忽ち衝突して混亂三日に亘りギゾーは職を辭し王は英國に出奔せり是に於て社會黨共和黨相合して假政府を設け新憲法を定めて共和政治を宣言せり。

二月末より各邦に民權擴張獨國統一運動盛に起り中にもバーデン、プロシアにては鮮血を瀝さつ三日各邦の代表者フランクフルトに假國會を

六、二月革命

2. 革命の影響

一、獨逸の諸邦

開き五月新國會を開設して憲法を議せしが秩序の恢復と共に國會の命行はれず獨逸は議會を退き普王亦帝冠を辭しければ國會は終に解散の已むなきに至り其後普王北獨逸同盟を計畫せしも是亦障害に遇ふて成らざりき。

二、奧國

獨逸に於ては三月ウィーンに學生市民の暴動起り次ぎてホヘミアも蜂起せしかば保守主義の巨魁たるメッテルニヒも遂に英國に逃亡し皇帝は姪フランツヨセフに讓位して退隱しぬ翌年ホンガリアの獨立運動（首領コスト）新に起りしが露國の援軍を得て漸く鎮定するを得たり。

三、伊國

ウィーンの變報到るやサルヂニア王カローアルベルト戰を獨逸に宣し半島統一を謀りしが翌年

四、
ス
ス
ウ
イ

（填軍の破る所となり位を子ビクトリオ・エマヌエ
ロに譲りて僅に滅亡を免れき。
スウイスに於ける永年の紛争は終局の勝利新教
諸洲に歸し列強が二月革命の影響を受けて干渉
を爲すの暇なきに乘じ憲法の改革を遂行して國
内の統一を完成せり。

七、クリミア戦争

1. ナポレオン三世

ルイス・ナポレオンはナポレオン一世の姪なり二月革命の後
 擧げられて大統領となるや腹心の士を擧げて己が授けとなし僧
 侶の歡心を買ふて法皇に近づき唯一の保護者たるの觀を裝ひ
 ては民心を收攬し一八五一年一二月機を見て非常政變を行ひ
 一般投票によりて新憲法の賛否を決し任期十年の大統領に任
 じしが後一年再び一般投票に附して帝位に即きぬ。

一、原因

イ、露國は地理上宗教上はた軍略上よりコンスタンチノブルを占據せんと欲せり。ロ、聖廟同
 題即ち露國はギリシア教を代表し佛國はカトリック教を代表して聖廟の保護權を土廷に要求し佛國竟に勝を制す。

一八五三年露土間の平和先づ破裂す野心満々たる佛帝は好機逸すべから

2. アクリミア戦争

二、重要事

イ、英佛同盟

すとし英國と同盟して土國を援け翌年三月終に露國に對して開戦を布告し聯合艦隊はクロンスタットを攻撃し陸軍はクリム半島のセバストホルを包圍せり。

ロ、其他の列國の態度

普、埃兩國は中立の態度を執りサルヂニアは見る所ありて翌年英、佛同盟に加入しクリミアに出兵しぬ。

ハ、セバストホルの陥落

一八五五年露帝ニコラ二世征途に崩じアレキサンドル二世立ちしがセバストホル終に陥落し列國バリーに和を結ぶ。

イ、露國はドナウ諸國の保護權を撤去し。ロ、

1. 英國の極東經營

三、結果

露國の黒海沿岸に兵庫を設くるを禁じ。ハ、黒海に於ける露國の軍艦は土國と同数たるべし。
ニ、平時に於ては列國軍艦のタルダホルス海峡を通過することを禁ず（一八五六、三月パリ和議）。

一、鴉片戦争

一八三九年鴉片輸入の事より清國と開戦し翌年南京條約（清國は償金を出し、香港を割譲し、港口を開く）を締結して兵を收む。

二、英佛清戦争

一八五六年に至り英清再び隙を開く清國の南京條約を破棄せしがためなり、佛國も其宣教師を殺されたるの故を以て参加せしが一八六〇年北京陷り北京條約（耶蘇教宣布の自由、開港場の追加償金の支出、を約し英國に香港對岸の地を割く）によりて和を結べり。

三、印度方面

一八五二年にはビルマのベツを奪び一八五六年には印度のウードを併せ次いで印度を本國の直轄としき。

2. 佛國の極東經營

一八五八年安南の不義を責めて西貢を占領し次いで交趾支那を得しが一八六三年にはカンボヂアを保護國としき。

3. 露國の極東經營

露國の東侵は一六八九年のネルチンスク條約によりて一頓控を被りしが一七二八年キヤクタ條約を結びて清國と通商を營み一八五八年愛理條約によりて黒龍江以北の地を得北京條約締結の際には斡旋の勞を取りし報酬として烏蘇里江以東の地を得たりき。

(補)

露國は一八六八年中アジア方面にてトルキスタンの北部中部を掠略シテハラを保護國としき。

八、極東の形勢

4. 日本

我が日本の開國は一八五四年始めて北米合衆國と通商條約を締結せる時にありしが爾來非常なる急足の進歩をなし東洋の英國を以て目せらるゝに至れり。

1. 名相ルカ

伊太利建國の三傑の一に居り機智と雄才とに富むクリミアの役起るや彼は早くもサルヂニアの地位を觀破して英佛と同盟しパリーの會議には委員として出席し奥國の伊太利に於ける暴狀を訴へて大に列國の注意を惹きしが是彼の一指を染めしに過ぎずして伊國の將來は彼の手腕を要する更に更に大なる者ありき。

2. 佛帝の

伊太利はフランシス一世以來奥國と争ひたる地なるにより勝利の後は聯邦を作り己其保護者たらんとの希望を有せしかば極力サルヂニアを助くるに決し私かにカブールをプロムビエールに招きて密約を結びき。

九、統伊太利の

3. 行業統の一進事

一、開戰

カブール歸來大に戰備を修め一八五九年戰亂終に破裂せしが同盟軍志士の義勇軍と戮力し連戦奥軍を破りぬ。

二、チウリヒ條約

ナポレオンは急に奥帝とピラフランカに會し、イ、ロンバルヂアをサルヂニアに與へ。ロ、モデナ、バルマ、トスカナ、法王領を各藩主に還し。ハ、聯邦を組織して法王を首長と仰ぐべきを約し同年チウリヒ條約にて確定しけるがモデナ以下の人民サルヂニア合併を望みて止まざるにより一八六〇年佛帝之を承認し、佛國はニースとサボヤとを得たり。

志士ガリバルヂは尙ほ満足せず同年義勇軍を提げてシチリアに入りて全島を征服し更に轉じて

4. 伊太利の建設

ナポリを平定すカブール之を見て前途を憂ひ王に勤めて出軍せしむ十月王親らナポリに進みしがガリバルヂは喜びて功を王に譲り翌年二月ナポリ王(フランシス二世)も擒につぎぬ。

一八六一年三月ピクトリオ・エマヌエロ伊太利王の位に登り全半島(ベネチア、法王領を除き)の主となるカブールは是歳六月卒しぬ。

1. 南北の相違

一、北部
イ、土地瘠薄氣候寒冷。ロ、自由を樂まんとて移住せる者多し。ハ、商工を業とす。

二、南部
イ、土地肥沃氣候温暖。ロ、大部分は貴族子弟の移住せるもの。ハ、農業に従事す。

南北事情の相違は奴隸問題に於ても氷炭相入れざりき即ち北部は奴隸を使役するは天道に悖り建國の趣旨に背くを以て宜

一〇、北米合衆國の南北戦争

2. 奴隸問題

3. 戦争の終局

しく解放すべしと主張し南部は殖産上の關係より之を拒否し驟然相敵視したりしが一八六〇年廢止黨の首領リンカーン大統領に擧げらるゝに及び南部は斷然北部と分離し翌年遂に干戈を交へき。

南軍初めは大に振ひしが一八六三年奴隸廢止令の發布(北部)より形勢忽ち一變し一八六五年北軍遂に南部の都リチモンドを攻陥して憲法を改正し黒人も選舉權を有するに至れり。

佛帝の對南米策

佛帝ナポレオン三世は南北戦争を利用し佛國の勢力を南米に扶植せんとし英西二國と同盟してメキシコ事件を惹起せり。

一八六一年三國はメキシコが債務を履行せざるより兵を出し償金支出を約せしめしが佛國のみ

附
コメキシ
コ事件

二、
コメキシ
コ帝國

は依然兵を撤せず内亂に乗じて首都を陥れ政府を顛覆し煥帝の弟マキシミアンを其皇帝たらしめき。

三、
結局

然るに共和黨は之に服せず加之北米合衆國も亦極力佛兵の撤去を迫りしかば佛帝は已むなく其兵を召還せり(一八六七)マキシミアンは其後共和軍の銃殺する所となる。

1. 原因

一、南北獨逸に於ける事情の相異

イ、北部は新教を奉じ南部には舊教其他の異宗教行はる。ロ、北部は純粹の獨逸民族なるも南部はマジール、スラフ、獨逸其他の異種族混同雜居す。ハ、北部は歐羅巴平野の一部にして南部は山地又は高原なり。

二、大獨逸黨と小獨逸黨

人種宗教等の異同より統一問題に於ても大獨逸黨と小獨逸黨(墺國を除外す)とを生じ互に敵視せり。

三、ビスマルクの鐵血政略

普王ウィルヘルム一世の王位に即くやビスマルクを擧げて内閣總理に任すビスマルクは小獨逸脱を發し統一問題は普國の振興によりて解決し得べく普國振興策は鐵と血とにありと絶對し其總理となるや直ちに軍備の擴張を強行して其機に到るを待てり。

一、普墺戰爭

2. 記事

事

一、普伊同盟

ビスマルクは戰爭を豫期し其準備として墺國の敵なる伊國と攻守同盟を組織す。(一八六六年四月)

二、開戰

六月遂に開戰墺軍はモルトケの軍略と普兵の精銳とに敵せずサクソニア、ハンノフェル、ボヘミア(サドワの決戦ありき)等は普軍に擧げられしも伊國方面にては墺軍勝利を得き。

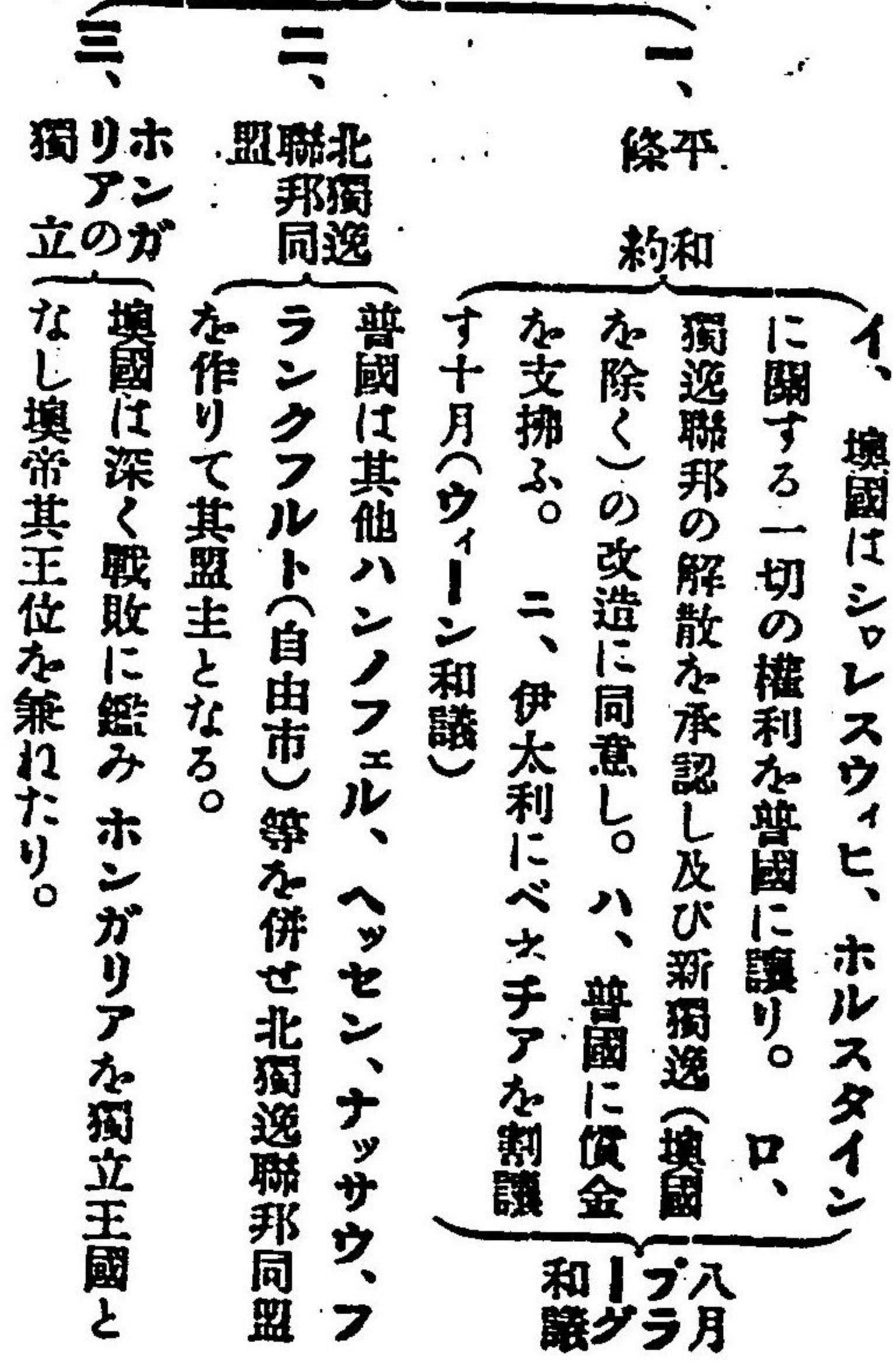
四、

シヤレスウイ
ルヒスホ
イルスタ
イン事

一八六三年シヤレスウイ、ホルスタイン事件起り普墺同盟して丁軍を破りしが翌年ウィーンの和議成りシヤレスウイ、ホルスタイン、ラウエングルヒの三邦は普墺兩國に讓與せられき然るに其處分問題より兩國の衝突を惹起し一八六六年戰端を開けり。

3. 結

果



原因

一、佛帝の聲望衰ふ

佛國は近來外交（イタリアにメキシコに普埃戰爭に）に失敗を重ねしかば政府攻撃の聲次第に高し佛帝の聲望大に衰ふ。

二、ダンブルグ問題

佛帝は民望回復の第一着手として普佛同盟を締結し次にルクセンブルグ購入の事を蘭國に謀りしに普國は盟約に背きて之に異議を挿みロンドン會議の結果ルクセンブルグは中立國となる、（一八六七、二月—五月）

三、西國王位繼承問題

一八六八年西國に内亂起り女王イサベラを廢して假政府を建て王位をホーヘンツォルレルンのレオポルド親王に捧ぐ佛帝報を得直に普國に抗議せしがレオポルド辭退の後更に同人をして王位を望ましめざるべき誓約を求めしにより兩國の和平遂に破裂す時に一八七〇年七月。

一、普佛戰爭 2. 戰記

一、佛國軍上の違算

外交の失錯より埃伊の援軍來らず動員も迅速を缺きしかば爲めに戰機を失し却りて敵軍の乘する所となる。

二、佛帝の降服

普軍勝に乗じて潮の如く侵入しメッツ、ストラスブルグの二堅岩重圍を受く佛帝は元帥マクマホンと共にメッツを救はんとしてセダンに圍まれ九月二日殘軍八萬五千と出て降る。

三、護國政府

敗報パリに達するやガンベッタ等假共和政府を作り都城の防備を修め又護國軍を編成して普軍に當りしが防守四ヶ月の後糧食全く盡きて降る（翌年一月）

翌年二月ベルサイユに假條約を結び五月フランクフルトの本條約によりて之を確定せり。

3. 結

果

- 一、平和條約 イ、エルサス、ロートリンゲンを普國に割讓し
ロ、償金五十億フランを普國に納る。
- 二、獨逸の統一 普王は聯邦に推されて新獨逸の皇帝となる。(一月八日佛國ベルサイユ宮に於て)
- 三、佛國の共和政…佛國は共和政治を確立す。
- 四、伊太利の統一 伊國は虚に乗じてローマを占領し伊太利統一の業を完成す。
- 五、露國の破棄 露國は一八五六年締結のバリー條約の廢棄を宣言したり。

1. 原因

一、叛亂

一八七五年ヘルツェゴビナの民土廷の重欲と宗教上の迫害とに堪へずして叛すモンテネグロ、セルビア之が後援たりき。

二、列國の干渉

露の外相ゴルチャコフ乗すべきの機となし列強に説きて内政の改革を土國に要求す土國人列國の干渉を怒りサロニキなる獨佛の領事を殺害しければ露、佛、獨、奧、伊の聯合艦隊忽ちサロニキに迫り損害の賠償を要求せり。

三、ブルガリアの殺害

既にしてブルガリア虐殺事件起り列國大に憤慨し中にも露國は勅員令を發して戰團準備に着手したりしに偶土國の改革令出て一時出兵の口實を失ひしが巧に奸策を弄しロンドン議定書を土廷に送付し其拒否する所となるや一八七七年四月土國に向ひて戰を宣しぬ。

一三、露土戰爭

2. 開戦

土國の名將オスマン・パシア、ブレブナの堅岩を固守し七ヶ月を支へしが後終に降参せしかば露軍は疾驅してアドリノブルを陥しが此時英國は人民保護を名として艦隊を土都に差遣しき。

3. 結果

一、サンスタフアの條約

イ、土國はモンテネグロ、セルビア、ローマニアの獨立を承認する事。ロ、ブルガリアの領域を甚しく擴大し露國保護の下に自治政を布く事。ハ、土地を割き償金を支拂ふべき事(同年三月) 英奥の抗議とビスマルクの仲裁とに依り列國會議ベルリンに開かれ前條約を破棄して左の如く訂正を行ふ。(同年七月)

イ、如故但領土の増減ありき。ロ、ブルガリアの領土を縮少し列國委員監督の

三、ベルリ會議

下に自治政を布く事。

ハ、(露國はベサラビア及びアルメニアの一部を得る事。

ニ、(ヘルツェゴビナ、ボスニアを奥國にテッサリアをギリシアにキプロス島を英國に譲る事

4. 社會黨

十九世紀の半頃より社會主義の團體起りしが殖産興業の盛大と共に政界の一大勢力となり獨佛の政治家は其調和策のために常に多大の心勞を費すに至りぬ露國の虛無黨は専ら秩序の破壊に力め皇帝貴族數々奇禍にかゝれり。

一四、ベルリン會議後の歐洲

1. 同盟國

2. 露佛盟

3. 希土戰爭

獨逸兩國は露佛二國の報復に備へんため一八七九年兩國の間に防禦同盟を結びしが伊國も亦法王の復仇を怖るゝとゴトハルド墜道開通以來政治上の關係親密を加へたるとに依り一八八七年該同盟に加入しき。

露佛は種々の事情より互に近づきつゝありしが露國が南下策實行の難きを見て極東の經營に力を注げる結果佛國の助力を要することとなり一八九一年遂に其同盟を公にしたり。

歐洲諸國は其後權力の平均を得て靜謐を得しかども宿題たる東方問題は容易に解決を見ざりき一八九五年クレテ島にキリスト教徒の迫害事件あり列國は直ちに土廷に抗議しけるも土廷事に托して荏苒決せず希土戰爭此に破裂せしが希軍大に敗れテッサリアを土國に割譲し償金を出し爾後希國の財政は列國の管理する所となる。

1. 英於中
於亞
露るに

一、露國の
侵略

爾來露國は裏海東岸の地方を併呑し一八八一年には清國イリの一部、一八八三年にはホーカンド地方、其翌年またメルフ地方を略して外裏海鐵道を敷設せしが一八九〇年パミール問題より英國と紛議を生じぬ。

二、英露
協商

露國のパミール遠征は印度を脅す者なりとし強硬なる抗議を招きしが一八九五年協商成立して事なきを得たり。

2. 英於東
於南
ア
佛るに

一、清
佛
戦争

佛國が安南を保護國となしたるより一八八三年清佛戦争開かれしが佛國は終に其目的を果しぬ

二、英佛
協商

英國は一八八六年ビルマを併呑し一八九六年佛國と協商してメコン河上流の勢力範圍を定めき

一五、ベルリン
會議後の
アジア

3. 日清
戦争と
干渉

一、日清
戦争

韓國東學黨の亂起るや清國は天津條約(日清間)を無視して出兵せしかば忽ち東洋の大亂となりしも交戦二年の後下關條約を締結して和を結ぶ(一八九五)

二、三國
干渉

下關條約成るや露國は獨佛二國と提携して所謂三國干渉を試み日本をして遼東半島を還附せしめ次ぎて清國に要請して膠州灣を獨逸に旅順口を露國に租借する事を諾せしめき。

4. 同日
英露
同盟

日英の兩國は清國と大なる利害關係を有するを以て清國の保全と否とは其影響従つて太甚なるに由り北清事變を機として兩島國の間に同盟を組織せり(一九〇二、一月)。

一六、北米合衆國の近状

1. ハワイの合併

一八九三年ハワイに革命あり王政を廢して共和政治となりしが一八九七年之を合併す。

2. 米西戦争

一八九五年西國の關領キウバに叛亂起り久しく鎮定せず大統領マッキンレー之に干渉して西國と戦端を開き遂に之を破りてフィリピン群島を得合衆國も亦東洋の大市場に参加することとなりぬ(一九八八)。